Salut

サリュ――フランス語で「救い」の意

2005.SUMMER

よく「社会を見る」とか「現代を見る」ということを言いますね。その場合の「見る」というのはどういうことかって考えると、対象を自分の向こう側に置いて観察して、自分自身は何ら揺り動かされない、というのは見るというのでないと思うんですね。「見る」というのは何かと言うと、その見るということの中に、私は何を「宗(むね)」として生きるかということがまずないといけないと思う。見たものが私に投げかけてくる問いかけに対して、私はそれでは今何をするのかという、そこまで含めないと「見る」という行為は成り立たないんじゃないか。

祖父江文宏

「対話 宗教への提言」より抜粋

2005 SUMMER

慶應義塾大学法学部学生会ニュース・マガジン「サリュ」通巻45号2005年夏号

應典院寺町倶楽部のニューズレター
サリュ
Vol.45

自分にささった矢を抜け

怠りは塵垢である。
怠りによって塵垢がつもる。
つとめはげむことによって、
また明知によって、
自分にささった矢を抜け。

「スッタニパータ～ブッダのことば」

Top Interview
すべての表現者にとって、そこに「平和」がありつづける …… 1
Special Talk
外と内を縁でつなぐ「out○in展」 …… 4
報告
out○in展 概要 …… 12
公開トーク
自分探しとしてのアート ～仏教から私たちは何を学ぶのか …… 14
Salut Gallery
應典院に集うアーティストたち …… 16
寄稿
スピリチュアル・寺子屋トーク ～「生老病死のコミュニティケア」に思う …… 18
いのちと出会う会50回 "いのち"を語り合って5年 …… 26
秋田光彦主幹から…… てんてこまい …… 30

アトリエインカーブ施設長 今中博之さん

すべての表現者にとって、そこに「平和」がありつづける

大阪市平野区・大和川の畔に知的障害者の通所授産施設・アトリエインカーブがスタートして、丸3年。今ではアウトサイダーアート＊の拠点として、世界的に知られるようになりました。同所の施設長であり、また一級建築士として「アートによる独立」に取り組む今中博之さんにお話を伺いました。

Top Interview

1963年生まれ。社会福祉法人素王会理事。アトリエインカーブ施設長。イマナカデザイン一級建築士事務所主宰。一級建築士。98年に開始した障害者福祉作業センター「アトリエ万代倉庫」事業を経て、03年に社会福祉法人素王会・知的障害者通所授産施設「アトリエインカーブ」事業を開始。應典院とのつながりも深く、第51回トヨタアートマネージメント講座大阪セッション、第38回寺子屋トークや「アーツなお仕事発見セミナー」等のゲストとして登壇。

「違い」に縛られず、「個」を表現する

小学校のときは本当に勉強ができなかったんですよ(笑)。マンモス校といわれる中学校に入るまで、学校の成績で他人と比較されるということを知らなかった。その学力の格差にすごく悩んで、しばらく登校拒否になりました。それでも必死に勉強しまして、中学を卒業するころにはそこそこの成績を取れるようになりました。

外と内を《縁》でつなぐ「out○in展」

ゲスト：荒島さと子さん
ANDOさん
はしのちなつさん

去る3月21日から27日まで、大阪・アート・カレイドスコープ05（OSAKA05展）のアートプロジェクト「out○in展」が開催されました。この公募プロジェクトは都市の芸術環境の拡大をめざして、発表場所を探しているアーティストと、その場所や空間などを提供できる人とをお見合いで広く結びつける試み。應典院では、3名の若き美術家とパフォーマンスグループ「ChouChou」、そして應典院と関係の深い劇団「劇創ト社」を加え、5組のアーティストが1週間のイベントを繰り広げました。

このたび應典院で展示を行った3名の作家と話し合いました

——まずは應典院で展示をしていただき、ありがとうございました。

きっかけは場と表現者が互いに釣書のような企画書を持ち寄り、大阪造形センターでの1分間プレゼンで決定した出会いでした。

はしの●企画書には「アタシはアナタです」という言葉を書き、私自身をあなたを通して垣間見るという思いを形にしたいと思いました。

結ばれる場所はどこもいいと思っていたのですが應典院に来て、芳名帳に印刷されていた「人はあなたに出会ってわたしになる」というコピーを見て、ここに間違いないと思いました。

荒島●私自身はお見合いに行くことができなかったので、ChouChouのメンバーが應典院に決めてくれました。やはり出会いとしかいいようがないなと思います。

劇団「劇創ト社」の詩か一人芝居とのコラボレーションをしたら、との提案はおもしろそうだし、ぜひやってみたかった。應典院のスタッフとも出会えましたし、いろんな人が関わりあってできていく場所のイメージがつかめてきました。

ANDO●「アートによって大阪を元気づけよう」というOSAKA05展の趣旨に賛同し、やってみようと思いました。

ぼくは仏教にも関心があり、アートを通して社会の活性化に取り組んでいる應典院をおもしろいと思いました。

▼左から、はしのさん、荒島さん、ANDOさん

見落としたものが見えてくる

——OSAKA05公募展では、新たな出会いと創造を生み出そうとアートを町に開くことに取り組んでいました。みなさんは、アートは何を社会に投げかけていると思われますか。

荒島●私はいつも人に見せるというのはどういうことだろうと考えています。まず場所を見ることとそ

▼荒島さと子＋Chou Chou「木を植えるひと」

こにどういう人がいるかが大事だと思っていました。

つくるときは自分の内に向かい、完成すると、より外へ社会へ向かおうとします。一度自分から離れていって、次に作品を通して社会が自分の方に入ってくるというイメージです。作品を見てくれた人たちの感想がいろいろで、作品自体の直接的な感想もありますが、作品を通してその人が昔見た風景や感情を思い出し、それを教えてくれることがあります。そんな何かを思い出すきっかけ、普段見落としてきたことが見えてくる経験を呼び起こすということに私は驚きます。はしの●作品をつくるという行為は自分のためかもしれません。人のために何もできないかもしれませんが、自分の創造性を突き詰めていく先で他者とつながっていけるのでは、と思っています。

私がつくり出す、みる人（他者）にとっては異空間なんですが、その空間に入ると自身の過去、そして未来へ繋がっていく「今」という地点があり、いきたい処へ導いていける、「どこでもドア」的空間装置をつくれたら素敵だなぁと、最近思っています。ＡＮＤＯ●人間が生きていく上で最も大切なものは精神力だと思っています。経済、政治などいろいろあるけれども最終的に最も大事なのは心の問題であり、文化の力だと思う。

アートには魂を揺さぶったり、何かに気づかせる力がある。ぼく自身は今デザインに興味があるんですが、芸術家やデザイナーというのは現代のシャーマンというイメージがあります。直感的にモノを見通し、現代人の活動に精神性・霊性を与えるという役割があると思うのです。実際デザイナーが経営者に全く違った視点から示唆を与えるという例はいくつもあります。

あとぼくは、これまで自分の「発想」を自分の利益にしようとしていましたが、最近はただ社会に役立てたいと思うようになりました。ｏｕｔ○ｉｎ展はそれを実践できるとても良い機会でした。

▲ANDO「OSAKA／OHAKA」

場所固有のチカラ

——今回は應典院という場に向き合って作品制作に取り組んでくださいましたが、ほかにも表現には

演劇の新たな可能性を発見

劇創ト社　城田邦生

美術館と化した應典院での公演は、演劇のジャンルにとってある種新しい方向性が見えるかもしれないと思い参加しました。

荒島さんの作品は肉体のオブジェと聞いていたので、肉体に囲まれた空間で何を演劇として打ち出せるのか考えました。世俗を超えた、限りなく精神性を高める本堂空間で、忽然と肉体がそこにある。精神と肉体の調和がとれていたり、とれなかったりというのが人間そのものなのだろうなと漠然と感じながら、人間らしい芝居「traffic!」をつくりました。

実際に荒島さんの作品を見たのは展覧会初日だったのですが、現場でオブジェが立ち上がったときには、最初考えていた演出にいろんな変更を重ねました。それはまるで、せりふもプロットも、明かりも音も何も決まっていない状況のなかでつくる「エチュード」に近く、相当即興性が求められるものでした。演じる側としては挑戦しがいがあったし、一緒にライブしていくという感覚を持ちました。

舞台と客席、日常と非日常という結界があり、袖幕がつくる黒の無限の空間のなかで、ぽっと浮かんだ小島のように舞台があり、役者がアクトをする。それが、演劇には必要な要素だと思っていました。けれど今回は白い壁に囲まれ、ご本尊の安置されている本堂仕様の空間。荒島さんがご本尊を中心に、本堂を実に有機的に活用して展示されていたためか、演劇もオブジェもそこにあって当然と感じられました。何度か應典院での公演をしていますが、本堂とすべてが融合している感覚をもったのは初めてです。

日本の演劇は、河原や青空の下の見世物として発祥しているといいます。今回、劇場環境があってこそ演劇は成立するというしばりが、自分の中にあったことに気づきました。

多様な場がありますよね。ギャラリーのような展示空間として保証された場と違いはあるんでしょうか。

はしの●いわゆるホワイトキューブ（白い壁面に囲まれた四角い展示空間）で展覧会をしたことはありませんが、自分の作品のなかで完結できたり、思いがぎゅっと込められるようなものであれば、そこでの展示もいいと思います。展示の際は、その場、その場にいる人、モノを感じた上で作品制作をしています。

ＡＮＤＯ●初めての展覧会でしたが、普通のギャラリーなら展示をしていなかったかもしれません。また合同展示は初心者にとってはありがたかったです。ほかのみなさんの作品の勢いにのらせていただいたなあと感謝しています。

荒島●私は色と形、ひとつひとつの像の間を追いかけることで生まれる想像と物語の世界に興味を持っています。そして作品のひとつひとつと同時に、作品のある「場」全体をつくりたいと思っています。

以前、れんが倉庫で展覧会をする機会があり、建物の雰囲気と作品が相まって、いろんなイメージがあふれました。作品を見た後の帰り道で、いろんな記憶をたどっていったという感想を聞くとき、思い出を蘇らせるような、そんな場と出会い、作品をつくりたい。そして私も見に来てくれた人もここにいる、ということを感じ立ち止まりたいです。

▼はしのちなつ「同感 homeopathy」

▲荒島さと子

――ＡＮＤＯさんはプレゼン時から作品をがらっと変更されていました。應典院を訪問された後に変えられたのですよね。

ＡＮＤＯ●そうです。應典院の場を見てここに合ったものをした方がいいと思いました。

ニューヨークに遊びに行ったときに高速道路から見たマンハッタンと墓地がそっくりで、いつか都市とお墓を対比させたいと思っていました。應典院の2階から目の前に広がったお墓を見てすぐに、あ、これはあれをやるしかないな思いました。

テーマを「大阪とお墓」と決めたら、さらにいろいろ共通点に気が付きました。まずＯＳＡＫＡとＯＨＡＫＡはスペルが似ています。ビルの足元に必ず

「人に寄り添う」アートを展開していきたい

ChouChou　山本美紀

今回のアートカレイドスコープの公募展は、場と人々をつなぎ、日々を積み重ねていく営みとしても意味あるものだったと思います。私は仕事で、音楽祭の研究やコンサートホールの企画分析調査をしてきました。ヨーロッパでは、様々な劇場、音楽祭があり、見る人が劇場の楽しみ方を知っています。一方、日本ではあいかわらずハコモノで何をするのかというのが議論の中心になっていますが、大切なのはハコモノにたどり着く道筋をつくることだと思います。観る人を育てるのは劇場ですが、劇場を育てるのは観る人です。非日常性というのは日常に関連がないと成立しないので、日常の隣にないといけません。非日常の舞台は見ることによって、日常にフィードバックできることがないとただの夢物語で、必要とされなくなる、と思います。

芸術が、自分のいまの状況を鏡のように客体化し、癒しへ導くものとして考えられてきたように、見に来た人の心が舞台だと思うし、その方の歩んでこられた固有の歴史、体験、そのときに感じた匂いや感情が含まれているものだと思います。

今回は、いろんなアーティストとの協働の実行委員会形式でしたので、フライヤーを作成する過程では、いろいろ考えさせられました。また、作品というのは厳然として現れてくるものなので、それに言葉をつける作業はたいへんでした。いつか人の手が届かないところに到達するのがアートの真意ですが、まずは見てもらわないといけない。正解は示さなくても舞台に向かってのイマジネーションを膨らます材料を言葉として発信していく努力が必要で、勉強していかなければと感じました。

私個人は、劇場でない場所をいかに劇場にしてくか、いかに祝祭化していくかということを考え続けながら、ChouChou とともに「人に寄り添うアート」、その人の人生に寄り添っていけるような芸術活動を今後も展開していきたいです。

▼劇創ト社「traffic!」

ある植栽は、まるで墓のお供えのようだとも気付きました。最近は大阪の建築を見てまわるのも流行だし、お墓もいろいろ凝ったデザインが出てきているので鑑賞してもおもしろいと思いました。写真を撮るために歩きまわって大阪が身近に感じられたのもいい経験でした。

はしの●私は2階ロビー「気づきの広場」での展示でした。タイトル（同感homeopathy）と素材（糸）だけは決めていましたが、完成形が見えないまま、とにかくやりながら見つけていこうと展示にかかりました。

いつもは一人で制作しているのに、今回はまわりにいろんな人がいて、その人たちの意識が作品に入っているように感じました。それは、私が「やりたい」と思っていたことだったんです。最初戸惑ったものの、「これがしたかった形なんだ」とちょっと、感動しています。

荒島●家では展示構想を何度もシュミレーションするのですが、やはり現場に来るとがらっと変わり、ご本尊は見る人の心の入っていく中心として、考えようと思いました。本堂ホールは、天井と壁を感じませんでした。このようにご本尊を自然にとらえられたことが意外でした。

今回、10年間作り続けてきた人体像を一度解体、バラバラにしてつなぎました。この場を訪れてそうするべきだと思ったんです。展示したときには、自分がつくっていくというのではなく、離れていくという感覚になりました。この場と融合し表現するのではなく表現となるということができたなあと、幸せでした。

それぞれのこれから

――out○in展をうけて、今後どのような活動の予定がありますか。

荒島●10年間つくり続けたものを壊し、またつくり直した後に一体何が残ったんだろうということを考えたいです。しばらく休憩し、考えを熟成させたい。自分の中で、何度もふり返るときをどんどん重ね、また制作をしようかなあと。それまでゆっくり歩いてみようと思っています。

今回、いろんな出会いがあったので、他の作品も見ていきたいです。

はしの●作品制作は私にとって、うちにあるものを表面上に出す行為で、表面上にたち現われた形が外へとつながっていきます。いわば、リハビリテーションとコミュニケーションのようなものかなあと思います。生きるコトはつくるコトだというくらい、密接な関係なのかもしれません。

今後も活動していくつもりですが、またお知らせします。

ANDO●人のために何かを引き受けるということが楽しくできました。最後までやり遂げたという自信にもなりました。経験がなかったため予想外に時間がかかったり、印象深い徹夜が2日あったり、よい思い出となりました。

はしのさん、荒島さんは應典院と他の2箇所で作品を展示されましたが、ぼくは展示の他にもフライヤーなどグラフィック面も担当したので、ここで2つ作品を展示したと思っています。ロゴは應典院への提案だったのですが、展覧会のコンセプトに使ってみてはどうかという荒島さんのすすめがあって、みんなのベクトルが同じ方向に向いていったという、非常におもしろい動きがありました。その結果、展覧会のコンセプトが固まりましたよね。これはちょっと感動的でした。

今後はデザインの仕事をしようと思っているのですが、これが原体験となりそうです。

▲みんなで記念撮影

――ありがとうございました。

Out○in展 概要 レポート＝事務局

■OSAKA05展公募プロジェクト

大阪府立現代美術センターが主催した大阪・アート・カレイドスコープOSAKA05の協賛事業「公募プロジェクト」として開催。これは、都市のあちこちにアートの場を同時多発的につくりだそうというもの。また表現者であるアーティストと場の提供者がお見合いをすることで成立するアートイベントである。審査員は存在せず、表現者とさまざまな場の提供者が話し合って作り上げるところに特徴があり、従来の公募展の枠組を越えたものであった。

お見合いに参加した表現者は30名。場の提供者は17箇所、北は箕面、南は天王寺に広がり、ギャラリーをはじめ、バー、旅館、建築設計事務所、ショールームなど多彩な場が集った。

■表現者と場のコラボレーション

應典院がお見合いで結ばれたのは、荒島さと子＋ChouChou、ANDO、はしのちなつ。この3グループに加え、應典院で稽古をし、馴染みのある劇団「劇創ト社」が参加した。アーティストの持っていた「表現したい」という思いと、「クリエイティブな場をつくりたい」という應典院の思いをコラボレーションするように、両者は同じ地平に立つことができた。

これを基点に展覧会を作り上げようと、主催は実行委員会形式にした。200通を超えるML上での意見交換、3回のミーティングを重ねながら意見を出し合い、合意をとりながら共に展覧会を作り上げる方法をとった。

■OUTとINをつなぐもの

out○in展のロゴは、應典院への「プレゼント」としてANDOが制作したものであった。このロゴに着想を得て、展覧会のコンセプトが固まった。円（縁、演、宴……）を挟んでOUT（外）とIN（内）をつなぐ。円形の本堂を収容した應典院の大きな枠のなかで、こちらとあちら、昼と夜、裏と表あるいは表裏一体、内と外、内＝外をつなぎ、観ること、見ること、視ることから各々のテーマにひきよせた展覧会を目指した。

それは、OSAKA05展のテーマ「交通するアート」を應典院を会場とした場合に生まれた解釈であった。

3月21日から27日までの1週間、應典院が現代アートの展覧会会場と様変わりした。

場所の持つ物語性と対話しながら制作する荒島は、樹脂で固めた人体像を一度解体し、無作為につなぎ合わせたインスタレーションを阿弥陀如来像の安置された本堂ホールを会場に展開した。また、はしのは広大な墓地をのぞむ2階ロビー全体に赤い糸を張り巡らせた。垂れ下がる振り子を揺らすとピンと張り詰めた糸がしなり、緊張感のある均衡は、独特の危うさをも孕むことを感じさせた。ANDOは、1階のスロープに大阪の建造物と墓を撮影した写真を並べて展示、また1、2階を結ぶ階段の窓に高層ビルが建ち並ぶ大阪の町の写真を設置し、大蓮寺の墓地を対比させたインスタレーションを展開した。

3名の作品展とともに本堂ホールでは、ChouChouと劇創ト社によるパフォーマンスが行われた。ChouChouは、荒島のインスタレーションとチャイコフスキーのピアノ曲、字幕映像を交差させてジャン・ジオノ作「木を植える男」を定本とした物語の主人公を描き出した。また劇創ト社は、荒島のインスタレーション空間を人間に囲まれた空間として捉えた。3話オムニバスによる演劇「traffic!」を3人の役者が初めて演出するというのも、ト社にとって新しいトライアルとなった。

■交通するアート

今回、アーティストは作品制作だけではなく運営面でも持てる力を発揮した。フライヤー制作をはじめ会場内のキャプション、解説パネルデザインはANDOが担当、オープニングパーティは、荒島、はしののつながりからカフェ「ロータスルーツ」、中国茶芸「さにほう」の出張カフェが花を添えた。また、各種イベントでの音響、照明などの技術面サポートや訪問者への対応など温かいホスピタリティは、ト社メンバーに負うところが大きい。

out○in展は場と表現者、表現者と表現者、さらに訪問者の「交通」を促進するための様々な取り組みであった。これらの「交通」がすべてスムーズだったわけではないが、表現のみならず、イベントの全体に深く関わるという体験が、これからの活動にどのように拡がっていくのか楽しみだ。今後も引き続くだろう「交通」を見届けたい。

自分探しとしてのアート
～仏教から私たちは何を学ぶのか

加藤義夫（大阪・アート・カレイドスコープOSAKA05展　プロデューサー）

今回のカレイドスコープ（以下カレイド略）では、大阪の20箇所くらいの場所で、総勢40名のアーティストが作品なり表現の場を設けました。

カレイドのねらいは、一言で言うとまちへアートを「交通」させること。アートって、現代美術、演劇、音楽等々、特定のジャンルに閉じこもってしまう傾向がある。同様に場所も専門のギャラリーとか劇場とかに特化させていくのだけど、カレイドではそれをまちへ開いて、日常や生活の中に登場させることで、思いがけない多様な出会いを作り出せないかと考えました。

例えばアーティストと建築家が出会い、両者協働の新しいプロジェクトが生まれる、というような、異ジャンルと混ざり合うアートを「交通するアート」と呼んできました。應典院さんがこれまでつくってこられた多様な場も、カレイドととても重なるものがあると思っています。

●

宗教の話は専門ではありませんが、現在の世界の情勢を見ていると、多くの人はキリスト教価値観の限界を知りつつある。同様にアメリカ型のグローバル経済が、世界を支配する構造にも限界がある。もともと西洋の価値観とは一神教に基づく絶対的正義がありますから、自然にせよ異教徒にせよ、価値に反するものはこれを支配もしくは弾圧してきたわけです。

では仏教はどうか、というとその歴史は寛容と融和の精神がありました。他の宗教と対立したときも、これを滅亡させるのではなく、取り入れようとする。仏教は人間の内面を対象化して、個々の多様な価値を認めていった。それは、同時に異なるものとの長い対話や理解が必要とされるのですが、それは私たちのカレイドの複眼的な価値観にも通じるものだと思います。仏教は葬式や法事だけではありません。日本人の精神性の根底にある仏教をどう活かしていくのか、とてもたいせつなことだと思います。

●

いま私たちは先行き不透明な時代を生きています。ニートが65万人、自殺者は毎年3万以上います。地域や家族がバラバラになって、精神の安定に寄与する場所がどんどん衰弱していきます。それに反応するように、トラウマを抱えた若いアーティストも少なくありません。アートの活動をしながら、心のバランスを取ろうとしているのかもしれない。自分と向き合うためのアート、自分探しのアートは、いま世界的な傾向にあると思います。

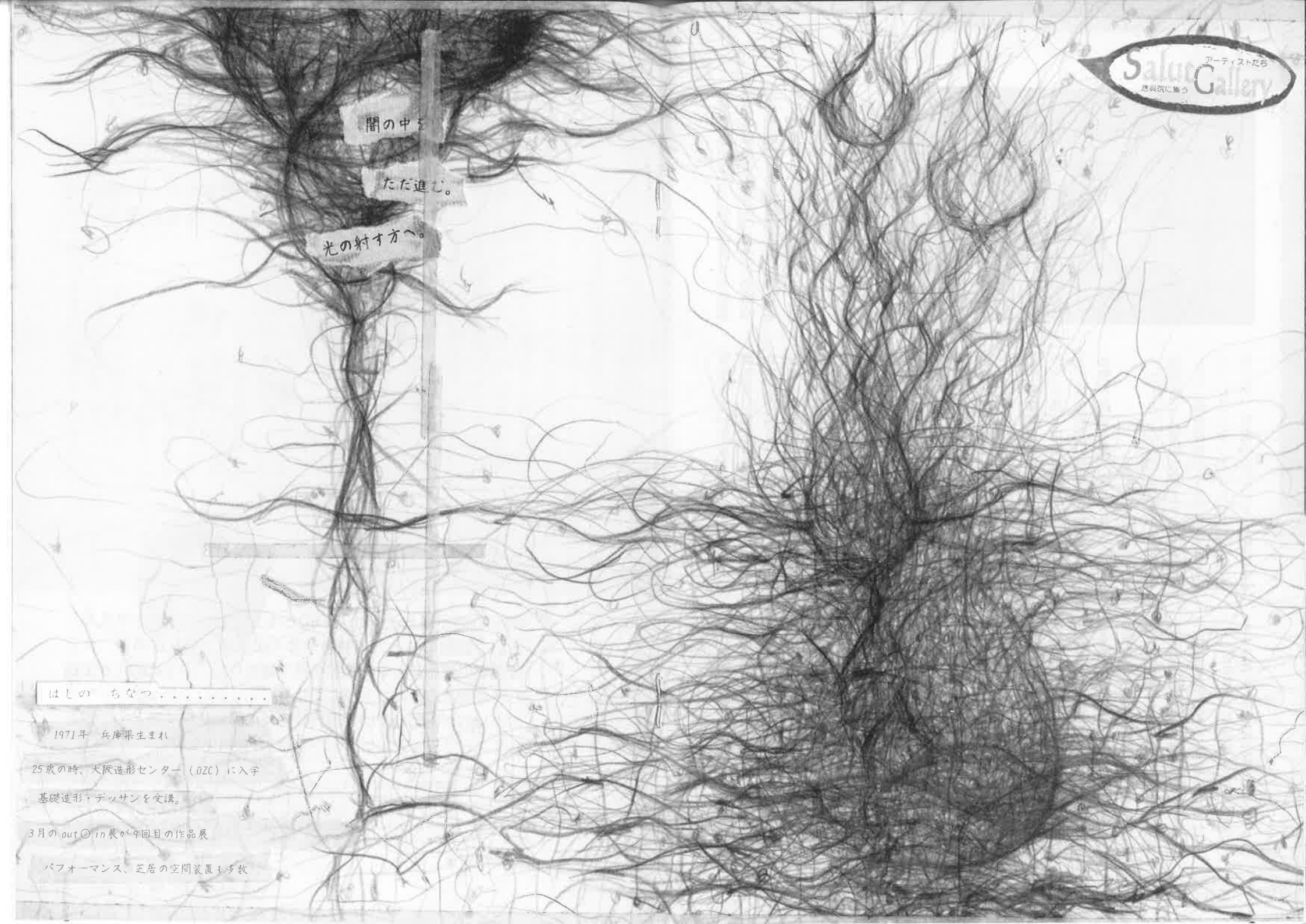
では、その心の指標となるものを私たちは何から学ぶことができるのか。容易ではありませんが、私はもう一度仏教という哲学や思想に学ぶ必要があると思います。

●

カレイドでは、大阪のさまざまな場所で、多彩なアートが交通しました。美術館やギャラリーだけでなく、レストランとかショップとかお寺とか、日常の中にアートが浸透していく。大仰にもっともらしく語るのではなく、自然な生活の中にアートがある。カレイドの目的は、そういう環境全体をつくることだったんです。

元々芸術は西洋から哲学としてもたらされましたが、これを日本のオリジナルな感覚としてどのように捉え直せばいいのか。かつて日本人の先人が、花鳥風月を愛でた生活に親しんだように、最早アートとは単に作品を指すものではないのかもしれない。自然の中で、私は生かされているというような共生感覚、いのちの感覚が、アートの持つ本質ではないかとも思います。その日本独自のアートが、いえ、日本だけでなく、東アジアの等しい価値として、西洋美術の世界に異なる何かを打ち出すことができるのではないか、と考えています。

（加藤義夫×秋田光彦　3月26日公開トーク「アートの『交響』空間」より抜粋・編集）



はしの　ちなつ

1971年　兵庫県生まれ

25歳の時、大阪造形センター（OZC）に入学

基礎造形・デッサンを受講。

3月のout⊙in展が9回目の作品展

パフォーマンス、芝居の空間装置も多数

スピリチュアル・寺子屋トーク
～「生老病死のコミュニティケア」に思う～

四天王寺国際仏教大学講師
谷山 洋三

第43回寺子屋トークは、“いのちを支えるビハーラを考える”という副題のもと、仏教者や多くの医療、福祉従事者、ケアの現場に携わる人々の参加を得て催された。少子高齢化が加速し、年間100万人以上が亡くなる多死社会のコミュニティケアのあり方が問われている現代。多くの課題を解くひとつの鍵としてスピリチュアルケア※の可能性が検討された。

※スピリチュアルケア
傾聴や対話などによって、スピリチュアリティの働きを確認していくこころのケア。窪寺俊之は、「スピリチュアリティとは、人生の危機に直面して「人間らしく」「自分らしく」生きるための「存在の枠組み」「自己同一性」が失われたときに、それらのものを自分以外の外の超越的なものに求めたり、あるいは自分の内面の究極的なものに求める機能である」と定義している。

仏教の現在と未来、そして地域福祉、在宅ホスピスに関心を持つ人たちにとっては、とても魅力的なイベントだった。現代仏教の問題に取り組んでいる人たちにとっては、松本の高橋卓志さんを應典院の秋田光彦さんが呼び、さらに坊主バーの清史彦さんも関わっているというだけで「これはオモロイ」となるはずだ。予想どおり、会場は満員になっていた。仏教者だけではなく、医療・福祉関係者も多かったようだ。

冒頭、先日のJR福知山線の事故被害者への黙祷から始まり、お経ではなく環境音楽の流れる中でのご本尊のライトアップと、この辺りは仏教色が見られたが、その後は会の終了まで、ほとんど仏教の「色」は出なかったが、スピリチュアルな「雰囲気」が時折感じられた。

秋田さんから、このイベントの趣旨が説明された。まず、「仏教がんばれ」ではないということ。「神宮寺の高橋さんのパワーに圧倒されたとしても、自分には何ができるのかを考えて欲しい」という配慮は結果的には杞憂だった。「こんなパワフルな坊さんがいたのか!?」という驚きが希望の光となって、多くの参加者にエネルギーを与えていた。

「死に場所は病院から家庭へ回帰しつつあるが、そこに僧侶が関わることは可能なのか?」「お寺の復権としてではなく、コミュニティケアのセンターとして活躍できるのか?」という問いかけ。これには、高橋さんが講演の中で淀みなく応えていた。その内容については、後段を読んでいただきたい。

以下、私の関心事である「スピリチュアルケア」に焦点を当てて今回のイベントを振り返り、高橋さんの衝撃的な回答についても私見を述べたい。

谷山洋三さん
1972年生まれ。四天王寺国際仏教大学人文社会学部専任講師。博士（文学）。専門は仏教福祉学、死生学。元・長岡西病院ビハーラ病棟ビハーラ僧。（特活）ビハーラ21事務局員、臨床スピリチュアルケア協会ネットワーク部門担当、（特活）日本ホスピス・在宅ケア研究会スピリチュアルケア部会世話人など、ビハーラやスピリチュアルケアの分野で活躍中。研究業績『仏教福祉学のキーワードを探る その2・苦－ビハーラ僧のスピリチュアルケア』（『日本仏教社会福祉学会年報』34号）ほか。共著に『スピリチュアルケアを語る－ホスピス、ビハーラの臨床から』（関西学院大学出版会）

コミュニティケアとは何か

私が高橋さんにお会いするのは二度目だ。最初は4年前、長岡西病院ビハーラ病棟で働いていた頃に、松本の神宮寺にお訪ねした。その時の印象は「僧侶というよりは文化人のような方だなぁ」というものだった。確かに仏教の色は見えないが、それは彼のこだわりではなく、こちらの（私の）こだわりに過ぎないのだ。彼の著作（『死にぎわのわがまま』現代書館）を読むと、禅僧らしい実存的なスピリチュアリティがうかがえる。現実世界の問題に対峙し続けることは、ある意味で修行であり、「己事究明」に直結するのではなかろうか。

さて、この日の講演の内容（目次）は次の通り。詳しくは、出版されたばかりの著書（『家で死ぬという選択』※企画室僧伽）を読んでいただいた方がいいだろう。

1. アキヒコ（岡村昭彦）に夢中になった理由
2. コミュニティケアに夢中になった理由
3. NPOに夢中になった理由
4. 家で死ぬ方法に夢中になれない理由
5. 現代仏教に夢中になれない理由

岡村昭彦さんについては、その著書（『定本　ホスピスへの遠い道』春秋社）を読んで知ってはいたが、高橋さんに強い影響を与えていたとは知らなかった。そう聞いて、高橋さんのモチベーションの一つが分かる気がする。本業（戦場写真家と僧侶）の枠を大きく超えて、社会に大きな貢献をしている（生命倫理学への貢献と、NGO／NPOによる様々な活動）。そして二人とも、いのちの現場に直接関わる仕事・活動をしている。

コミュニティケアとは「生活の基盤を置く場所で、私は私として成り立っている。だからそこからむりやり引き離されるのはいやだ。私が生きた『馴染み』のその場所で、私は病み、老い、そして死んでいくための支援である（※同書）。地域社会と大家族制度の崩壊と同時に失ってしまったケアの機能を、別の形で復活させるということだが、容易なことではない。様々な社会資源を有機的に結合させるには、大変な労力が必要である。それでも時代の流れは、施設型ケアから在宅ケア（もしくはその代替としてのユニットケアやグループホーム）に移り始めている。戦前生まれの人たちよりも明確に意志を発揮する団塊の世代は、10年以内に「高齢者」となり、今世紀の前半に死を迎える。コミュニティケアは単なる新しいケアの在り方ではなく、よりよい形で実現するべき課題である。その対象となる世代にとっても、彼らを支える世代にとっても、他人事ではない。自分自身の問題として考えなくてはならない。

NPOは高橋さんの活動の基盤だが、彼は既存のシステムを踏襲するのではなく、その地域や状況に適応した新しいシステムを構築している。ケアタウン浅間温泉も、あたかも自分自身が利用することを想定しているかのように、使いやすく機能的である。小規模・多機能のサービス拠点として、馴染みのある生活圏内に「あんしん」を提供しようとしている。

『家で死ぬという選択』には、アイルランドとイギリスの例が詳しく記されている。日本の医療者にとっても参考になることが報告されているが、スピリチュアルケアについては素直に肯けないところがあるので、このことに焦点を絞ってみたい。目次の最後の「5. 現代仏教の問題」にも関わることでもある。

スピリチュアルケアと宗教者

「スピリチュアルケアに宗教者は必要ですか?」という高橋さんの質問に対して、イギリスのホスピスマネージャーは「NO」と答えたという。彼にとってもショッキングだったようだし、私にとっても衝撃的な一言だった。

高橋卓志さん

臨済宗神宮寺住職・（特活）長野県NPOセンター代表・（特活）ケアタウン浅間温泉理事・（特活）ライフデザインセンター代表理事・特活夢バンク事業組合理事長・NGOアクセス21代表ほか。1948年松本市生まれ。「いのち全体のケア」は寺の本来の役目と考え、多彩な市民活動を展開。発題は、戦場写真家岡村昭彦に出会ったことで始まったいのちと向き合う活動の軌跡－チェルノブイリ医療支援システム構築からタイHIV感染女性の就業支援、団塊世代の知識、技術、ネットワークを生かす受け皿としてのNPOの構築と中間支援、遊興地としての役目を終えた地元浅間温泉を現代の湯治場＝ケアタウンとして復活再生させ、さらに地域に住まう人々の終焉まで看取りきるデイホスピス構想まで－が、つい最近終えたばかりのイギリス、アイルランドへのホスピスの源流を訪ねる旅の報告とともに軽妙かつ雄弁に語られた。

主著は『生き方のコツ、死に方の選択』（鎌田實氏との共著）・集英社文庫、『死にぎわのわがまま』・現代書館、『ホスピス―最期の輝きのために』・オフィスエム、新著に『家で死ぬという選択』・企画室僧伽。

しかしながら、彼の新刊を読んでみると、いくつかの誤解があるように思える。まず、「スピリチュアルケア」の意味について、どちらかというと日本にその概念が入ってきたばかりの頃の理解をしているようだ。つまり、spiritualを「宗教的」と訳していた頃の、宗教的ケアとほとんど重なり合うような解釈が見られる。「カウンセリングサービス」という見出しの内容は、私の目にはスピリチュアルケアに相当すると思えるし、著書での「スピリチュアルケア」の内容は、スピリチュアルと言うよりは宗教的に思える箇所もある。その担い手としての宗教者像は、チャプレンというよりは、スピリチュアルケアの専門的な研修もその素養もないお坊さんをイメージしているようだ。

別のホスピスのコーディネーターは「私の経験上、いままで『神とのいざこざ』を持つ人に出会ったことはありません」と言っている。高橋さんも経験上これに同意している。しかし私はビハーラ僧として、10名足らずではあるが「神（超越的存在）とのいざこざ」を持つ人に出会ったことがある。仏堂のあるビハーラ病棟では、入院患者の1～2割の方が定期的にお参りに参加している。日本での宗教的ニーズが皆無であるという認識を持つのは早計ではなかろうか。

イギリスのホスピスでは、常勤のチャプレンがいなくても、チャプレンや牧師は呼べばいつでも来てもらえるらしい。日本では「すぐに」来てもらえる態勢ができているだろうか？　さらに、先述のホスピスマネージャーは「宗教的エモーション（感情）を持った医療者、特に看護婦がいれば、それ（スピリチュアルペイン）は解消され、ホスピスが成り立っていきます」と述べている。日本には、宗教的エモーションを持っていて、かつそれを自覚している医療者はどれほどいるのだろうか？　そして患者・家族の話をゆっくり聞けるような環境なのだろうか？

「無痛の中にいて共苦を感じられるか」という批判は痛烈だった。対人援助に関わる人たち（私も含めて）は、そのこころを謙虚に受け取りたい。これは今回の講演でたぶん唯一の仏教者らしいの発言だったように思える。

現代仏教の問題として、「坊さんは一体何のプロなのか？」という厳しい問いかけがあった。「死の専門家」だと思っているかもしれないが、それは妄想に過ぎない。死の周辺にいるだけだ。私もこの点については同感だ。すべての坊さんが「生死」について深く思索を巡らしているわけではない。「死の専門家」となるための教材は膨大にあるが、すべての坊さんがそれらに手を付けているわけではない。

では、坊さんには何も期待できないのだろうか？

でも高橋さんのようなクリエイティブな坊さんもいる。――余韻を残したまま、第一部が終了した。

いのちの紙芝居

休憩時間には、2階ロビーで「お寺の出前」のイベントが行われていた。さっきまでの余韻が溶けていくような心持ちで、大崎さんのハーモニカの音色を聴いていた。

そして第2部のシンポジウムが始まった

まずは、米沢なな子さん。高齢者住宅情報センターの相談員の経験などから、有料老人ホームについてお話しされた。無料で、相談、施設紹介、見学の調整、時には契約に立ち会うこともあるという。真摯な対応をしていることがよく分かる。体が動かなくなったら入居できないので、終の棲家を探すのなら、元気なうちに入居するべきだという。確かにその通りだ。成年後見制度と遺言書をあらかじめ準備することも考えた方がよさそうだ。有料老人ホームは「自宅」なのだが、24時間看護師が常駐し、協力医、スタッフの教育・経験、そして覚悟が必要なので、ターミナルケアをするところは少ないらしい。

次は、南吉一さん。在宅ホスピスあおぞらの所長・医師としての活動を報告された後、いのちの紙芝居「健ちゃん棒」を実演してくれた。このお話しのあらすじを紹介しておこう。

●

健一くんのおじいちゃんが、在宅ホスピスケアを受けるために病院から帰ってきた。訪問看護師が点滴をしてくれ、往診医も来てくれた。おじいちゃん

は医師に「何か掴まるもの（精神的な支え）が欲しい」と訴えた。それを聞いた健ちゃんは、押入から棒を持ち出してきた。それは、家族みんなで富士山登山をしたときに使った杖だった。天井からその棒が吊され、ベッド上に座ったおじいちゃんは棒を握ってみた。棒には「おじいちゃん、ありがとう、健一」と書かれていた。棒に掴まって体を持ち上げてみると、体と心が癒されるようだった。おじいちゃんはいつも棒と一緒に生活を続け、最期の時にもその「健ちゃん棒」を抱えていた。

●

「健ちゃん棒」は、おじいちゃんの精神的な支えであり、家族の絆、特に孫の健ちゃんの愛情を示すシンボルである。体と心を癒してくれる、スピリチュアルケアの道具でもあったといえる。

三番目は、清史彦さん。私も関わっている（特活）ビハーラ21の趣旨と活動について説明し、僧侶としてビハーラ運動に関わっていった経緯を述べてくれた。「なぜ、末期になってから僧侶が呼ばれるのか。仏教は生きている人のためにあるのではないのか?」という思いは、現代仏教の諸問題に悩む僧侶たちの共通のものであろう。

最後は、元商社マンの医療コンサルタントでビハーラ21のメンバーの高橋俊市さん。今回のシンポジウムでは聞けなかったのだが、高橋さんがビハーラ21にかける思いは、「自分が生きてこれたのは、上の世代がいたからこそ。だから自分が動けるうちに、次の世代に何かを残していきたい」というスピリチュアルなものだ。

宗教者の可能性

スピリチュアリティは、日本語に訳しにくい言葉だ。敢えて浄土教的な表現するなら「阿弥陀の働き」である。分かる人にしか分からないだろうが、そこに宗教とスピリチュアリティの関係が見えてくる。

様々な宗教は、スピリチュアリティを独自に表現したものである。その時代・文化・社会の影響を受けているので、それぞれが別異なことを言っているように思えるが、深いところでは共通している。儀礼やその対価にしか興味がないような人はさておき、宗教者は教義の中で理解すれば（悟りを開くところまではいかなくてもいいだろうが）、スピリチュアリティを理解しやすい立場にいる。さらに、自分の信仰を客観視することが、スピリチュアルケアに資する準備になる。

ただし、宗教的ケア（祈願の援助や宗教的な声かけなど）とむやみに混同してはいけない。スピリチュアルケアの現場は公共性が強いところが多いからである。ターミナルケアの現場がよく知られているが、それだけではなく、一般の医療や福祉、教育現場においてもスピリチュアルケアは広がりつつある。高橋卓志さんが、宗教者によるスピリチュアルケアの限界を感じた理由の一つは、何の訓練も受けないまま、しかも相手のニーズを感じ取らないままでケアに臨む宗教者をイメージしているからではなかろうか。確かにそれではケアにならないだろう。ケアのためには専門的な訓練が必要なのである。

スピリチュアルケアは、宗教者のもつ可能性を引き出すことができる。布教伝道には役に立たないだろうが、宗教界は社会に貢献できる人材を送り出す可能性を持っている。特に、コミュニティケアやビハーラ活動／運動の現場にこそ、スピリチュアルケアが必要なのだ。

第2部ゲスト紹介

◇

南　吉一さん（医師／在宅ホスピスあおぞら所長）
1933年生まれ。1958年大阪大学医学部卒業。卒業後、大阪大学医学部衛生学（現・環境医学）教室に入る。1974年南医院開院。1993年から環境医学実習の非常勤講師を担当し、訪米ホスピス研修を指導する。1998年在宅ホスピス「あおぞら」を開設、7年目の今年南医院を後進に託し、在宅診療活動に専念。在宅で終末期をすごす人の死への恐れを和らげるために、手作りの紙芝居で患者と対話する。

米沢なな子さん
（高齢者住宅情報センター大阪相談室長）
神戸生まれ。大学卒業後、タウン誌の編集に10年携わる。1997年より有料老人ホームの運営会社で広報および生活相談室で勤務。2003年11月より現職。センターでの方針を「まずは、多くの方々に知っていただく。そして独自の基準による第三者評価事業に取り組み、ホームの質の向上に努めたい」と話す。

高橋俊市さん
（【特活】ビハーラ21理事・医業経営コンサルタント）
1938年京都府生まれ。商社勤務時代、医療ガス部門に15年間在籍、利益追求を第一義とした企業人として医療に関わる。8年前、義母の葬儀で聞いた導師の法話に心を打たれ、仏教に興味を持つ。以来枚方の仏教道場である響命精舎（けいめいしょうじゃ）に参加し、現在も勉強中。

清　史彦さん
（真宗大谷派瑞興寺住職・【特活】ビハーラ21事務局長）
1952年大阪生まれ。京都大学法学部卒業後商社に6年半勤務。瑞興寺長女との結婚後、京都大谷専修学院入学、得度を受け僧侶となる。1992年以来大阪ミナミに坊主バーを開き、現代の開かれた寺の実践を試みる。1996年に瑞興寺住職に、同年真宗大谷派大阪教区会議員、2001年からは宗議会議員をつとめる。ビハーラ21には事務局長として参画、「ビハーラ僧研修講座」の企画にもあたる。

〝いのち〟を語り合って5年
～いのちと出会う会50回

▲50回記念を参加者とともに祝う

2000年6月にスタートした「いのちと出会う会」。以来5年間、ほぼ毎月欠かさず開催され、今や應典院の名物事業として定着した。

去る5月15日の50回記念には、47名が参加、また過去の49人のゲストのみなさんから、多くのメッセージをいただいた。

「いのちと出会う会」の足跡をふり返るとともに、50回記念当日を報告する。

「いのちと出会う会」は、代表世話人・石黒良彦さんの呼びかけがきっかけで始まった。

石黒さんは、89年に二男・邦之君を急性の白血病で、97年には妻・佐知子さんを胃がんで亡くした。ふたりのはやすぎる死に直面し、魂を奪われるように感じた石黒さんは、心のよりどころを求め、さまよっているとき、後に第1回目のゲストとなるホスピス医・南吉一さんとの出会う。

南さんの後押しもあり、石黒さんは「ふたりの死を無駄にしたくない。生き直そう」と「いのちと出会う会」を始めた。

以来ほぼ毎月第3木曜日に開催され、医療、福祉、介護さらに国際協力、宗教まで幅広いテーマで「いのち」について語り合ってきた。話題提供者は、石黒さんの幅広いネットワークからお願いした方ばかり。

話題提供者が1時間語り、その後は参加者が共に「わかちあう」。

「人から直接話を聞くことで自分の考えが深くなった」とは石黒さん。参加者それぞれの声を大切にし、「わかちあい」の時間を設けることで、それぞれ気持ちを新たにしてもらいたいと願う。

「5年間、無我夢中で50回」……。50回記念の当日、まずは石黒さんがこの5年間をふり返った。

●

「〝いのちと出会う会〟を発足したのは、二人の死の体験がありました。〝ふたりの死はなんだったのか〟、〝二人の苦しみは何か意味があったのか〟〝次の世で二人は元気に暮らしているのか〟と、心の中で問い続けていました。けれど、会を続けていく中で、死を考えるだけでなく、死を見ることで、生きる力を得たいという気持ちに変わってきました。生きる意味とか、生きる目的とか、なんのために私はうまれてきたのかとかそんなことを……」

●

発会当初は、確かに〝死〟をテーマとしたものが多い。しかし、石黒さんの心境の変化と共に、そのテーマは広がっていく。それはすなわち、石黒さんの活動の広がりにほかならない。

現在、野宿者支援、釜ヶ崎での活動を初め、多くの社会活動に参加する石黒さんのエネルギーには脱帽するばかりだ。

現代では、死後の救済を説くのが仏教であると捉えがちである。しかし、そもそもお釈迦様は、よりよく生きることを教えとした。〝死〟から〝生〟へと、石黒さんの考えが変化したのも、應典院という寺で会が行われていることに、無縁でないように思う。

●

「かつて、私はオヤジ狩りにあった経験がありますが、死ぬような思いをしたのはもちろんですが、しばらく続いた肩の痛みが、いろいろと考えるきっかけを与えてくれました。

多くの人は、痛みがないのがあた

りまえというか、考えない生活をしている。痛みを知って初めてその苦しみを知ることができるのに……。

ふたりの死もそうだと思います。あたりまえと思っていた家族の生活が突然あたりまえでなくなる……。それがどれだけつらく、苦しいことか。

あたりまえの生活が、どれだけの恵みの中で支えられているのか、それを今は実感できるんです。会を通じて、そのことをより深く感じることができるようになったことに、感謝しています」

●

毎回、会では話題提供者が語り、参加者の〝わかちあい〟の時間を持つ。ゲストの話題を通して、参加者が自分を語り、自身の生へと意識を傾けていく。

自身の病気を語る方、子どもを失った経験を語る方……、悲しみの体験が語られる。しかし、その体験の最後には〝生〟に対する希望で締めくくられることが多い。

悲しみを共にし、いのちに対する願いに気づく。

●

「語ることを通じ、妻も息子も与えられた生を精いっぱい生きた、と思えるようになりました。二人は今も、私の人生を輝かせてくれています。今、この世の中で私は何をなすべきなのかということが、自分の人生のテーマです。

今現在、戦っている方、外国にいっていろんな貧しい人々、苦しい人々に手をさしのべられている方々の話を聞くことで、少しでも生きる勇気を持っていただけたらと、5年間続けてきたしこれからも続けたいと思っています。

つながっている命の中に私たちは生きています。49人のゲストの命、話された参加者の多くの命、その中で話されたいろんな命、多くの命が〝いのちと出会う会〟の中で出会ったと感じています。

いろんな苦しみ、悲しみと向き合うことが自分自身と向き合うことになると思います。自分がこの時代に生きていることは何なのか、それぞれの人が考えるきっかけになるように願い、〝いのちと出会う会〟をこれからも続けていきます」

多くの〝いのち〟とつながりながら、これからも〝いのちと出会う会〟は続いていく。

【2000年】

■第1回　6月15日
「死にゆく患者に語りかける言葉」
在宅ホスピスあおぞら所長　南吉一さん

■第2回　7月20日
「仏教紙芝居は心のアート」
浄土真宗観念寺住職　宮本直樹さん

■第3回　9月21日
「エンディングサポート～自分らしい最期をつくりたい」
宝塚NPOセンター事務局長　森綾子さん

■第4回　10月19日
「死別へのこころの準備」
医師　谷荘吉さん

●

【2001年】

■第5回　1月18日
「不登校の子どもと家族」
不登校新聞記者　福村幸子さん

■第6回　2月15日
「難病と闘う子どもたち」
メイク・ア・ウィッシュ・ジャパン広報　大野寿子さん

■第7回　3月15日
「ネパールの子どもたちといのち」
ネパールの子供を育てる会会長　槙本昭彦さん

■第17回　3月20日
「自分らしい葬儀をデザインする」
宝塚市立中央公民館　木崎いずみさん

■第18回　4月18日
「ささえあう。寄り添いの介護」
大阪YWCAケアハウス・シャロン千里　佐久間早苗さん

■第19回　5月16日
「青い目の禅僧とニッポン」
禅岳寺住職　峰本卓潤さん

■第20回　6月20日
「遺児たちの心に七色の虹を」
あしなが育英会　伊藤道男さん、濱上景さん

■第21回　7月20日
「クマの棲める豊かな森を」
日本熊森協会企画推進局長　瀬戸悠子さん

■第22回　9月19日
「若者は"死"から何を学ぶのか」
奈良保育学院　野田隆生さん

■第23回　10月17日
「死にゆく人々との対話」
ホスピス医・南吉一さんと阪大医学生のみなさん

■第24回　11月21日
「盲目となって見えてきた人生の意味」
日中総合交流事業アドバイザー　菅野芳宣さん

■第34回　11月20日
「子どもたちに導かれて～いのちの不思議」
鍼灸師・介護支援専門員　渥美覚さん

■第35回　12月18日
「元気で長生きPPKのコツ」
日本笑い学会副会長　昇幹夫さん

●

【2004年】

■第36回　1月22日
「地雷畑で見た夢」
テラ・ルネッサンス代表　鬼丸昌也さん

■第37回　2月19日
「『闘病闘唄』トークとミニライブ」
シンガー・ソングライター　KOUTAROさん

■第38回　3月18日
「死を見つめるということ」
岸和田喜多病院カウンセラー　岩崎美樹さん

■第39回　4月15日
「人間として生を受けた喜び」
私塾わんど塾塾長　山藤忠雄さん

■第40回　5月20日
「人生は逆転できる」
人財育成コンサルタント　笹岡郁子さん

いのちと出会う会　開催記録（1回～49回）

■第8回　4月19日
「人生の永遠を問う～死は終わりではなく」
ライフカウンセラー　守屋武さん

■第9回　5月17日
「わが家で死にたい～家族と看取り」
田辺病院看護婦・僧侶　中村敏さん

■第10回　6月21日
「病院のなかの生と死・家族と別れの時」
関西医科大病院看護部長　大蔵サチ子さん

■第11回　7月19日
「ホトケと癒し・仏教看護に何が可能か」
浄土宗済橋寺住職・神戸医師会看護専門学校講師　明石和成さん

■第12回　9月20日
「掃除と炊き出しこそ、わが人生」
綜合開発代表取締役　樋口順三さん

■第13回　10月18日
「ハンセン病の患者さんたちと、出会い、別れ」
訪問看護婦・大阪医専講師　渡邊典子さん

■第14回　11月15日
「オキナワ捕虜収容所秘話」
写真家・スタジオ経営　渡辺憲央さん

●

【2002年】

■第15回　1月17日
「いのちと平和を語りつぐ」
関西こども文化協会副理事長　蔦田夏さん

■第16回　2月21日
「平成版・看病用心鈔を語る」
浄土宗安福寺僧侶　大崎信久さん

●

【2003年】

■第25回　1月16日
「看取りとホスピス」
大阪生と死を考える会会長・はやしやまクリニック名誉院長　谷荘吉さん

■第26回　2月20日
「剛は自転車で転んで死んだ」
腎性尿崩症友の会　神野啓子さん

■第27回　3月20日
「釜ヶ崎の人々から教えられたもの」
大阪建設労働者生活相談員　入佐明美さん

■第28回　4月17日
「遺族として共に生きる」
神戸ひまわり遺族の会　中村寿子さん

■第29回　5月15日
「『生と死の教育』と若者たち」
関西学院高等部教諭　古田晴彦さん

■第30回　6月19日
「小さくされた者の側に神は立つ」
日本フランシスコ会神父　本田哲郎さん

■第31回　7月17日
「紙芝居『中村久子の生涯』」
紙芝居師　杉浦貞さん

■第32回　9月18日
「小児病棟に元気を届けよう」
あそぼっくる代表　出口雄二さん

■第33回　10月16日
「『ホピの予言』上映会」
ランド・アンド・ライフ　辰巳玲子さん

■第41回　6月17日
「子どものちから」
釜が崎こどもの里　荘保共子さん

■第42回　7月15日
「ガンを超え、めざせ地平線」
サイクリスト　エミコ・シールさん

■第43回　9月16日
「大人が変わらなければ子どもは変われない！」
NPO法人・青少年育成審議会理事長　吉村憂希（うさぎ）さん

■第44回　10月21日
「生命からのメッセージを伝える」
TAV交通死被害者の会事務局　米村幸純さん

■第45回　11月18日
「フィリピンへ虹の橋を」
片岡鍼灸整骨院院長　片岡春樹さん

■第46回　12月16日
「人生の金メダリストになるために」
バレーボール五輪金メダリスト　中野真理子さん

●

【2005年】

■第47回　2月17日ビデオ鑑賞
「アジアの子供たちから学ぶもの」
NGO沖縄アジアチャイルドサポート代表理事　池間哲郎さん

■第48回　3月17日
「マザーテレサに出会って」
サンチの会代表　是枝律子さん

■第49回　4月21日
「命といのちを見つめて」
「病児遺族わかちあいの会小さないのち」代表　坂下裕子さん

秋田光彦主幹から……

てんてこまい

呼吸するお寺・應典院の、1月～4月の活動記録です。関連のエンティング事業なども併せて報告します。

1月

◇1日……晴れやかな新年を迎える。希望に満ちた一年としたい。
◇4日……恒例の年頭詣。15日までの間、約200軒の檀信徒宅を訪問。新年のお祝いを家々のご先祖に届ける。
◇13日……スタッフ交流会。最若手の大阪市会議員・福島しんじ氏事務所にて、教育行政について意見交換。若き感性を勉強熱心さに敬服。その後、焼肉で新年会！
◇17日……阪神淡路大震災10周年。10年前、神戸の廃墟跡を駆けた思い出。應典院本堂でスタッフとともに追悼の法要と法話を行う。
◇22日……和泉市コミュニティ講座で講演。
◇25日……上町台地からまちを考える会の事務所にて、関西経済同友会の幹部の方々と今後の都市ビジョンについて意見交流。私は持論の「学習共同体」説をひとしきり。
◇26日……大阪警察病院で、術後1年の検診結果がシロと出て安堵。体調万全でがんばろう！

2月

◇1日……寺町倶楽部の運営委員会。新年度の体制変更について詳細を述べる。
◇4日……総幼研フォーラムにて、明星大学の高橋史朗教授の講演。巷の風評は別にして、論旨も明快で話しぶりも堂々たるもの。夜は総幼研20周年記念祝賀会。
◇7日……大阪経済大学の長田寛康教授と、新年度の特殊演習「演劇をマネジメントする」について打ち合わせ。1学期間全8回の講義。
◇14日……NHK「クローズアップ関西」の取材。生前個人墓にまつわる、死後の自己決定がテーマ。
◇17日……いのちと出会う会。「アジアの子どもたちから学ぶもの」ビデオ鑑賞。
◇18日……神戸被災地NGO協働センターにて「若者と雇用」をテーマに述べる。
◇19日……千葉大学の長田謙一教授の研究室一行が見学。関西の個性的なアートセンターを視察されているとか。
◇21日……浄土宗千葉教区教化団の一行20数名が見学。應典院の社会活動を述べる。
◇24日……空堀の文化施設・直木三十五記念館オープニング・セレモニーに参加。市民の手作りミュージアムの快挙！上町台地の新しい文化スポットの誕生がうれしい。

3月

◇1日……朝日新聞インタビュー取材。
◇7日……上田紀行さんの紹介で、京大大学院の日高明君と面談。少林寺拳法のスポーツマンだが、拳法を通して仏教に関心を持ったそうだ。
◇11日……地元夕陽丘中学校の卒業式に来賓として参列。いつものことだが、若い人たちの巣立ちに胸が熱くなる。子どもたちの未来に、我々大人の責任は大きい。
◇12日……井上治代さんが主宰する桜葬ネットワークのシンポジウムに参加。桜の下で眠る、究極の樹木葬！
◇14日……原案を担当した映画「カーテンコール」の宣伝会議のため、配給会社のコムストックの佐藤仁美部長が来寺。
◇15日……NHK「ぶらり関西」の取材。最近下寺町の注目が大きい。演劇の應典院をアピール。
◇17日……いのちと出会う会。サンチの会の是枝律子さんがマザーテレサを語る。
◇18日……ココルームで「仏法のお庭」第1回を実施。会場は閑散としていたが、読経と法話の2時間のライブ。私なりの「教化活動」として続けていきたい。美しい仏教にふれてもらえたら。
◇20日……大蓮寺春季彼岸大法要。
◇21日……生前個人墓・自然の新契約者対象の帰敬式。仏教入門の道場。参加8名。夕方からは、アートの祭典・カレイドスコープを應典院にて開会。若者たちが盛大に。
◇26日……カレイドの最終日に、美術評論家の加藤義夫さんと対談。お寺でなぜアートなのか、を論じ合う。刺激的な内容でした。
◇28日……ココルームの「紙の芝居劇場」のイベントにゲスト参加。元ホームレスのおじさんたちの立体紙芝居の舞台に感動。表現することによって、生きる力を取り戻す。

4月

◇1日……創教出版新入社員就任式を應典院本堂で厳かに。幼稚園と合同開催。
◇5日……映画「カーテンコール」関係者試写。
◇7日……應典院の年度所感を述べる。お寺の社会教化事業としての取り組みを強調。
◇10日……称念寺様で、法然上人輪番御忌法要に出勤。7ケ寺出勤のゴージャスな儀式。
◇14日……尊敬する神宮寺の高橋卓志さんが来寺、8月開催のモンゴル僧声明ライブの打ち合わせ。
◇18日……石井聰亙監督を招き、新作「鏡心」のプレス試写を應典院で開催。10社参加があり反響が期待できそう。
◇19日……梅田ロータリークラブ月例会で、大阪の寺町文化について講演。
◇21日……新設なった大阪大学コミュニケーションデザイン・センターを訪問。旧知の研究者たちと「社学協働」の可能性について協議。夜はいのちと出会う会。病児遺族わかちあいの会の坂下裕子さん。
◇22日……府立の現代美術センターの肝いりで、新たに大阪アートNPOコンソーシアムが発足、8団体のひとつとして参加する。今年の暮れに大掛かりなアートフェスを計画。
◇24日……浄土宗関連の東京の淑徳大学の長谷川匡俊理事長が来寺、大蓮寺・應典院の社会活動を説明申し上げる。
◇26日……大阪経済大学の特殊演習「演劇をマネジメントする」第1回講義。息子や娘の世代の若者たちに、1学期間続く演劇の海図を提示する。

應典院寺町倶楽部 主催・共催の催し ラインナップ・・

いのちと出会う会

第54回　10月20日（木）
「視覚障害者とともにマラソンを」
話題提供者：佐伯典彦さん
（デイサービスセンター国津園・介護福祉士）

第55回　11月17日（木）
「掃除と鍵山秀三郎さんに学んだこと」
話題提供者：佐藤弘一さん
（西宮掃除に学ぶ会代表）

※いずれも第3木曜日18:30～21:00まで

「アートなまちの探検隊 VOL 2」

（第3回 大阪・アート・カレイドスコープ "do art yourself" 協賛事業）

山口洋典さん（上町台地からまちを考える会事務局長）を案内人に迎え、ワンコリアフェスティバル、からほりまちアートなどのまちの「非日常性」から「日常性」を探る上町台地ツアー。
○日　程：10月30日（日）
○会　場：上町台地周辺
○参加費：1,500円

主催：應典院寺町倶楽部
共催：上町台地からまちを考える会
協賛：大阪府立現代美術センター

★お問合せ・ご予約は……
應典院寺町倶楽部
FAX06-6770-3147
メール info@outenin.com

第3回　大阪・アート・カレイドスコープ
「Do Art Yourself ～すべての人は表現者」

現代美術を通じて大阪の姿を世界に向けて情報発信し、大阪の都市の魅力の向上を目指すアート事業に参画します。

「自適人の肖像」展

上町台地は古くからの職業と新たなビジネスが渾然一体となり、職、住、遊、学の人が多様に関わっている。この上町台地ならではの仕事（職＝生計をたてること）をしている「自適人」を紹介。作家は、自適人と出会いインタビュー取材し、触発された何かを作品化する。人間と仕事、技とアートを結ぶ展覧会。
○日程：12月5日～17日
○会場：大阪府立現代美術センター

「遊行のフォークロア 上町台地・境界を歩く」展

岩を立てることから、それは始まる。毎日2回、せわしい大阪の、しかも師走の街を作家大久保英治氏がただひたすら歩く。上町台地や下寺町の美しい樹木林、人々の雑踏、車の群れ、連なる寺院とネオン輝くホテル街。周辺が織りなす時は、歴史と文化を育む。彼はその中に入り、うごめき、身体を使い、立ち上るエネルギーと場を知り、視覚化する。風を受け、人々と出会い、ともに歩く人たちと語らい、弾む息を感じる。
○日程：12月7日～13日
○会場：應典院・下寺町周辺

主催：大阪府立現代美術センター
企画・運営：大阪アートNPOコンソーシアム
コーディネート：應典院寺町倶楽部
協力：上町台地からまちを考える会

【大阪アートNPOコンソーシアム】
NPO法人大阪アーツアポリア／應典院寺町倶楽部／特定非営利活動法人キャズ（CAS）／NPO法人こえとことばとこころの部屋（cocoroom）／NPO法人DANCE BOX／NPO法人Beyond Innocence／NPO法人記録と表現とメディアのための組織remo）／NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト（recip）

應典院寺町倶楽部のニューズレター
サリュ
Vol.45

■発行日
2005年9月10日
■定価
200円
■編集人
秋田光彦
■スタッフ
池野亮光、大塚郁子、田中いずみ
■発行所
應典院寺町倶楽部
〒543-0076
大阪市天王寺区下寺町1-1-27
TEL 06-6771-7641
FAX 06-6770-3147

編集後記

小説『ソフィーの世界』は、「あなたは誰？」と書かれた手紙がきっかけで、深遠な哲学の道を歩む14歳の少女の物語だった。14歳でなくても「私はだれ？」という問いは誰もがもちうるものではないだろうか。

「私はだれ？」に明解な回答を与えてくれるものではないけれど、その謎解きの小さな手掛かりとなるのが現代アートだ。「out ○ in 展」座談会で語られたように、過去の記憶を想起させたり、普段見落としてきたものが見えてきたり、想定外の感情を引き起こしたり。「地獄の釜をのぞくようなもの」とある人は表現したが、隠された内面をのぞくような、恐ろしくもドキドキする体験だ。そこで導かれた感情の所在に思いを巡らす観る側と同様に、作家自身もその直感の由来を探り、「私はだれ？」の問いと常に向き合っている。

今中さんが既成のルールや手法にとらわれないアウトサイダーアートの表現に魅了され、クライアントの創作環境づくりを最重要視するアトリエインカーブを立ち上げられたのも、自らのオリジナリティを探す旅に出られたことがきっかけだ。「違い」に縛られない「個」としての自分を表現できるデザインの世界。そこにとどまることなく、より深い自らへの問いが、新しい出会いをもたらし、フィールドを広げたのではないだろうか。

妻子の死に直面し、「二人の人生は何だったのか」との問いから「いのちと出会う会」を立ち上げられた石黒さん。当初は医療、生と死の問題を扱われたが、野宿者、世界の貧困にある子どもたちの支援、環境保全への啓発……など関心も広がり、毎月の例会は50回を迎えた。体会もなく、その継続を支えたのは情熱と問題意識であった。石黒さんは「ますます自分の存在の意味を考えるようになった」と語る。

小説のソフィーは時空を超えて思想家に出会い、私を探す旅を続けていくが、時空を超えずとも、まっすぐに向き合えば「私はだれなの？」か、少しわかるときを迎えられるのかもしれない。

（大塚郁子）

外と内を《縁》でつなぐ「out○in展」

ゲスト：荒島さと子さん
ANDOさん
はしのちなつさん

去る3月21日から27日まで、大阪・アート・カレイドスコープ05（OSAKA05展）のアートプロジェクト「out○in展」が開催されました。この公募プロジェクトは都市の芸術環境の拡大をめざして、発表場所を探しているアーティストと、その場所や空間などを提供できる人とをお見合いで広く結びつける試み。應典院では、3名の若き美術家とパフォーマンスグループ「ChouChou」、そして應典院と関係の深い劇団「劇創ト社」を加え、5組のアーティストが1週間のイベントを繰り広げました。

このたび應典院で展示を行った3名の作家と話し合いました

——まずは應典院で展示をしていただき、ありがとうございました。

きっかけは場と表現者が互いに釣書のような企画書を持ち寄り、大阪造形センターでの1分間プレゼンで決定した出会いでした。

はしの●企画書には「アタシはアナタです」という言葉を書き、私自身をあなたを通して垣間見るという思いを形にしたいと思いました。

結ばれる場所はどこもいいと思っていたのですが應典院に来て、芳名帳に印刷されていた「人はあなたに出会ってわたしになる」というコピーを見て、ここに間違いないと思いました。

荒島●私自身はお見合いに行くことができなかったので、ChouChouのメンバーが應典院に決めてくれました。やはり出会いとしかいいようがないなと思います。

劇団「劇創ト社」の詩か一人芝居とのコラボレーションをしたら、との提案はおもしろそうだし、ぜひやってみたかった。應典院のスタッフとも出会えましたし、いろんな人が関わりあってできていく場所のイメージがつかめてきました。

ANDO●「アートによって大阪を元気づけよう」というOSAKA05展の趣旨に賛同し、やってみようと思いました。

ぼくは仏教にも関心があり、アートを通して社会の活性化に取り組んでいる應典院をおもしろいと思いました。

▼左から、はしのさん、荒島さん、ANDOさん

見落としたものが見えてくる

——OSAKA05公募展では、新たな出会いと創造を生み出そうとアートを町に開くことに取り組んでいました。みなさんは、アートは何を社会に投げかけていると思われますか。

荒島●私はいつも人に見せるというのはどういうことだろうと考えています。まず場所を見ることとそ

▼荒島さと子＋Chou Chou「木を植えるひと」

こにどういう人がいるかが大事だと思っていました。

つくるときは自分の内に向かい、完成すると、より外へ社会へ向かおうとします。一度自分から離れていって、次に作品を通して社会が自分の方に入ってくるというイメージです。作品を見てくれた人たちの感想がいろいろで、作品自体の直接的な感想もありますが、作品を通してその人が昔見た風景や感情を思い出し、それを教えてくれることがあります。そんな何かを思い出すきっかけ、普段見落としてきたことが見えてくる経験を呼び起こすということに私は驚きます。はしの●作品をつくるという行為は自分のためかもしれません。人のために何もできないかもしれませんが、自分の創造性を突き詰めていく先で他者とつながっていけるのでは、と思っています。

私がつくり出す、みる人（他者）にとっては異空間なんですが、その空間に入ると自身の過去、そして未来へ繋がっていく「今」という地点があり、いきたい処へ導いていける、「どこでもドア」的空間装置をつくれたら素敵だなぁと、最近思っています。ＡＮＤＯ●人間が生きていく上で最も大切なものは精神力だと思っています。経済、政治などいろいろあるけれども最終的に最も大事なのは心の問題であり、文化の力だと思う。

アートには魂を揺さぶったり、何かに気づかせる力がある。ぼく自身は今デザインに興味があるんですが、芸術家やデザイナーというのは現代のシャーマンというイメージがあります。直感的にモノを見通し、現代人の活動に精神性・霊性を与えるという役割があると思うのです。実際デザイナーが経営者に全く違った視点から示唆を与えるという例はいくつもあります。

あとぼくは、これまで自分の「発想」を自分の利益にしようとしていましたが、最近はただ社会に役立てたいと思うようになりました。ｏｕｔ○ｉｎ展はそれを実践できるとても良い機会でした。

▲ANDO「OSAKA／OHAKA」

場所固有のチカラ

——今回は應典院という場に向き合って作品制作に取り組んでくださいましたが、ほかにも表現には

演劇の新たな可能性を発見

劇創ト社　城田邦生

美術館と化した應典院での公演は、演劇のジャンルにとってある種新しい方向性が見えるかもしれないと思い参加しました。

荒島さんの作品は肉体のオブジェと聞いていたので、肉体に囲まれた空間で何を演劇として打ち出せるのか考えました。世俗を超えた、限りなく精神性を高める本堂空間で、忽然と肉体がそこにある。精神と肉体の調和がとれていたり、とれなかったりというのが人間そのものなのだろうなと漠然と感じながら、人間らしい芝居「traffic!」をつくりました。

実際に荒島さんの作品を見たのは展覧会初日だったのですが、現場でオブジェが立ち上がったときには、最初考えていた演出にいろんな変更を重ねました。それはまるで、せりふもプロットも、明かりも音も何も決まっていない状況のなかでつくる「エチュード」に近く、相当即興性が求められるものでした。演じる側としては挑戦しがいがあったし、一緒にライブしていくという感覚を持ちました。

舞台と客席、日常と非日常という結界があり、袖幕がつくる黒の無限の空間のなかで、ぽっと浮かんだ小島のように舞台があり、役者がアクトをする。それが、演劇には必要な要素だと思っていました。けれど今回は白い壁に囲まれ、ご本尊の安置されている本堂仕様の空間。荒島さんがご本尊を中心に、本堂を実に有機的に活用して展示されていたためか、演劇もオブジェもそこにあって当然と感じられました。何度か應典院での公演をしていますが、本堂とすべてが融合している感覚をもったのは初めてです。

日本の演劇は、河原や青空の下の見世物として発祥しているといいます。今回、劇場環境があってこそ演劇は成立するというしばりが、自分の中にあったことに気づきました。

多様な場がありますよね。ギャラリーのような展示空間として保証された場と違いはあるんでしょうか。

はしの●いわゆるホワイトキューブ（白い壁面に囲まれた四角い展示空間）で展覧会をしたことはありませんが、自分の作品のなかで完結できたり、思いがぎゅっと込められるようなものであれば、そこでの展示もいいと思います。展示の際は、その場、その場にいる人、モノを感じた上で作品制作をしています。

ＡＮＤＯ●初めての展覧会でしたが、普通のギャラリーなら展示をしていなかったかもしれません。また合同展示は初心者にとってはありがたかったです。ほかのみなさんの作品の勢いにのらせていただいたなあと感謝しています。

荒島●私は色と形、ひとつひとつの像の間を追いかけることで生まれる想像と物語の世界に興味を持っています。そして作品のひとつひとつと同時に、作品のある「場」全体をつくりたいと思っています。

以前、れんが倉庫で展覧会をする機会があり、建物の雰囲気と作品が相まって、いろんなイメージがあふれました。作品を見た後の帰り道で、いろんな記憶をたどっていったという感想を聞くとき、思い出を蘇らせるような、そんな場と出会い、作品をつくりたい。そして私も見に来てくれた人もここにいる、ということを感じ立ち止まりたいです。

▼はしのちなつ「同感 homeopathy」

▲荒島さと子

――ＡＮＤＯさんはプレゼン時から作品をがらっと変更されていました。應典院を訪問された後に変えられたのですよね。

ＡＮＤＯ●そうです。應典院の場を見てここに合ったものをした方がいいと思いました。

ニューヨークに遊びに行ったときに高速道路から見たマンハッタンと墓地がそっくりで、いつか都市とお墓を対比させたいと思っていました。應典院の2階から目の前に広がったお墓を見てすぐに、あ、これはあれをやるしかないな思いました。

テーマを「大阪とお墓」と決めたら、さらにいろいろ共通点に気が付きました。まずＯＳＡＫＡとＯＨＡＫＡはスペルが似ています。ビルの足元に必ず

「人に寄り添う」アートを展開していきたい

ChouChou　山本美紀

今回のアートカレイドスコープの公募展は、場と人々をつなぎ、日々を積み重ねていく営みとしても意味あるものだったと思います。私は仕事で、音楽祭の研究やコンサートホールの企画分析調査をしてきました。ヨーロッパでは、様々な劇場、音楽祭があり、見る人が劇場の楽しみ方を知っています。一方、日本ではあいかわらずハコモノで何をするのかというのが議論の中心になっていますが、大切なのはハコモノにたどり着く道筋をつくることだと思います。観る人を育てるのは劇場ですが、劇場を育てるのは観る人です。非日常性というのは日常に関連がないと成立しないので、日常の隣にないといけません。非日常の舞台は見ることによって、日常にフィードバックできることがないとただの夢物語で、必要とされなくなる、と思います。

芸術が、自分のいまの状況を鏡のように客体化し、癒しへ導くものとして考えられてきたように、見に来た人の心が舞台だと思うし、その方の歩んでこられた固有の歴史、体験、そのときに感じた匂いや感情が含まれているものだと思います。

今回は、いろんなアーティストとの協働の実行委員会形式でしたので、フライヤーを作成する過程では、いろいろ考えさせられました。また、作品というのは厳然として現れてくるものなので、それに言葉をつける作業はたいへんでした。いつか人の手が届かないところに到達するのがアートの真意ですが、まずは見てもらわないといけない。正解は示さなくても舞台に向かってのイマジネーションを膨らます材料を言葉として発信していく努力が必要で、勉強していかなければと感じました。

私個人は、劇場でない場所をいかに劇場にしてくか、いかに祝祭化していくかということを考え続けながら、ChouChou とともに「人に寄り添うアート」、その人の人生に寄り添っていけるような芸術活動を今後も展開していきたいです。

▼劇創ト社「traffic!」

ある植栽は、まるで墓のお供えのようだとも気付きました。最近は大阪の建築を見てまわるのも流行だし、お墓もいろいろ凝ったデザインが出てきているので鑑賞してもおもしろいと思いました。写真を撮るために歩きまわって大阪が身近に感じられたのもいい経験でした。

はしの●私は2階ロビー「気づきの広場」での展示でした。タイトル（同感homeopathy）と素材（糸）だけは決めていましたが、完成形が見えないまま、とにかくやりながら見つけていこうと展示にかかりました。

いつもは一人で制作しているのに、今回はまわりにいろんな人がいて、その人たちの意識が作品に入っているように感じました。それは、私が「やりたい」と思っていたことだったんです。最初戸惑ったものの、「これがしたかった形なんだ」とちょっと、感動しています。

荒島●家では展示構想を何度もシュミレーションするのですが、やはり現場に来るとがらっと変わり、ご本尊は見る人の心の入っていく中心として、考えようと思いました。本堂ホールは、天井と壁を感じませんでした。このようにご本尊を自然にとらえられたことが意外でした。

今回、10年間作り続けてきた人体像を一度解体、バラバラにしてつなぎました。この場を訪れてそうするべきだと思ったんです。展示したときには、自分がつくっていくというのではなく、離れていくという感覚になりました。この場と融合し表現するのではなく表現となるということができたなあと、幸せでした。

それぞれのこれから

――out○in展をうけて、今後どのような活動の予定がありますか。

荒島●10年間つくり続けたものを壊し、またつくり直した後に一体何が残ったんだろうということを考えたいです。しばらく休憩し、考えを熟成させたい。自分の中で、何度もふり返るときをどんどん重ね、また制作をしようかなあと。それまでゆっくり歩いてみようと思っています。

今回、いろんな出会いがあったので、他の作品も見ていきたいです。

はしの●作品制作は私にとって、うちにあるものを表面上に出す行為で、表面上にたち現われた形が外へとつながっていきます。いわば、リハビリテーションとコミュニケーションのようなものかなあと思います。生きるコトはつくるコトだというくらい、密接な関係なのかもしれません。

今後も活動していくつもりですが、またお知らせします。

ANDO●人のために何かを引き受けるということが楽しくできました。最後までやり遂げたという自信にもなりました。経験がなかったため予想外に時間がかかったり、印象深い徹夜が2日あったり、よい思い出となりました。

はしのさん、荒島さんは應典院と他の2箇所で作品を展示されましたが、ぼくは展示の他にもフライヤーなどグラフィック面も担当したので、ここで2つ作品を展示したと思っています。ロゴは應典院への提案だったのですが、展覧会のコンセプトに使ってみてはどうかという荒島さんのすすめがあって、みんなのベクトルが同じ方向に向いていったという、非常におもしろい動きがありました。その結果、展覧会のコンセプトが固まりましたよね。これはちょっと感動的でした。

今後はデザインの仕事をしようと思っているのですが、これが原体験となりそうです。

▲みんなで記念撮影

――ありがとうございました。

Out○in展 概要 レポート＝事務局

■OSAKA05展公募プロジェクト

大阪府立現代美術センターが主催した大阪・アート・カレイドスコープOSAKA05の協賛事業「公募プロジェクト」として開催。これは、都市のあちこちにアートの場を同時多発的につくりだそうというもの。また表現者であるアーティストと場の提供者がお見合いをすることで成立するアートイベントである。審査員は存在せず、表現者とさまざまな場の提供者が話し合って作り上げるところに特徴があり、従来の公募展の枠組を越えたものであった。

お見合いに参加した表現者は30名。場の提供者は17箇所、北は箕面、南は天王寺に広がり、ギャラリーをはじめ、バー、旅館、建築設計事務所、ショールームなど多彩な場が集った。

■表現者と場のコラボレーション

應典院がお見合いで結ばれたのは、荒島さと子＋ChouChou、ANDO、はしのちなつ。この3グループに加え、應典院で稽古をし、馴染みのある劇団「劇創ト社」が参加した。アーティストの持っていた「表現したい」という思いと、「クリエイティブな場をつくりたい」という應典院の思いをコラボレーションするように、両者は同じ地平に立つことができた。

これを基点に展覧会を作り上げようと、主催は実行委員会形式にした。200通を超えるML上での意見交換、3回のミーティングを重ねながら意見を出し合い、合意をとりながら共に展覧会を作り上げる方法をとった。

■OUTとINをつなぐもの

out○in展のロゴは、應典院への「プレゼント」としてANDOが制作したものであった。このロゴに着想を得て、展覧会のコンセプトが固まった。円（縁、演、宴……）を挟んでOUT（外）とIN（内）をつなぐ。円形の本堂を収容した應典院の大きな枠のなかで、こちらとあちら、昼と夜、裏と表あるいは表裏一体、内と外、内＝外をつなぎ、観ること、見ること、視ることから各々のテーマにひきよせた展覧会を目指した。

それは、OSAKA05展のテーマ「交通するアート」を應典院を会場とした場合に生まれた解釈であった。

3月21日から27日までの1週間、應典院が現代アートの展覧会会場と様変わりした。

場所の持つ物語性と対話しながら制作する荒島は、樹脂で固めた人体像を一度解体し、無作為につなぎ合わせたインスタレーションを阿弥陀如来像の安置された本堂ホールを会場に展開した。また、はしのは広大な墓地をのぞむ2階ロビー全体に赤い糸を張り巡らせた。垂れ下がる振り子を揺らすとピンと張り詰めた糸がしなり、緊張感のある均衡は、独特の危うさをも孕むことを感じさせた。ANDOは、1階のスロープに大阪の建造物と墓を撮影した写真を並べて展示、また1、2階を結ぶ階段の窓に高層ビルが建ち並ぶ大阪の町の写真を設置し、大蓮寺の墓地を対比させたインスタレーションを展開した。

3名の作品展とともに本堂ホールでは、ChouChouと劇創ト社によるパフォーマンスが行われた。ChouChouは、荒島のインスタレーションとチャイコフスキーのピアノ曲、字幕映像を交差させてジャン・ジオノ作「木を植える男」を定本とした物語の主人公を描き出した。また劇創ト社は、荒島のインスタレーション空間を人間に囲まれた空間として捉えた。3話オムニバスによる演劇「traffic!」を3人の役者が初めて演出するというのも、ト社にとって新しいトライアルとなった。

■交通するアート

今回、アーティストは作品制作だけではなく運営面でも持てる力を発揮した。フライヤー制作をはじめ会場内のキャプション、解説パネルデザインはANDOが担当、オープニングパーティは、荒島、はしののつながりからカフェ「ロータスルーツ」、中国茶芸「さにほう」の出張カフェが花を添えた。また、各種イベントでの音響、照明などの技術面サポートや訪問者への対応など温かいホスピタリティは、ト社メンバーに負うところが大きい。

out○in展は場と表現者、表現者と表現者、さらに訪問者の「交通」を促進するための様々な取り組みであった。これらの「交通」がすべてスムーズだったわけではないが、表現のみならず、イベントの全体に深く関わるという体験が、これからの活動にどのように拡がっていくのか楽しみだ。今後も引き続くだろう「交通」を見届けたい。

自分探しとしてのアート
～仏教から私たちは何を学ぶのか

加藤義夫（大阪・アート・カレイドスコープOSAKA05展　プロデューサー）

今回のカレイドスコープ（以下カレイド略）では、大阪の20箇所くらいの場所で、総勢40名のアーティストが作品なり表現の場を設けました。

カレイドのねらいは、一言で言うとまちへアートを「交通」させること。アートって、現代美術、演劇、音楽等々、特定のジャンルに閉じこもってしまう傾向がある。同様に場所も専門のギャラリーとか劇場とかに特化させていくのだけど、カレイドではそれをまちへ開いて、日常や生活の中に登場させることで、思いがけない多様な出会いを作り出せないかと考えました。

例えばアーティストと建築家が出会い、両者協働の新しいプロジェクトが生まれる、というような、異ジャンルと混ざり合うアートを「交通するアート」と呼んできました。應典院さんがこれまでつくってこられた多様な場も、カレイドととても重なるものがあると思っています。

●

宗教の話は専門ではありませんが、現在の世界の情勢を見ていると、多くの人はキリスト教価値観の限界を知りつつある。同様にアメリカ型のグローバル経済が、世界を支配する構造にも限界がある。もともと西洋の価値観とは一神教に基づく絶対的正義がありますから、自然にせよ異教徒にせよ、価値に反するものはこれを支配もしくは弾圧してきたわけです。

では仏教はどうか、というとその歴史は寛容と融和の精神がありました。他の宗教と対立したときも、これを滅亡させるのではなく、取り入れようとする。仏教は人間の内面を対象化して、個々の多様な価値を認めていった。それは、同時に異なるものとの長い対話や理解が必要とされるのですが、それは私たちのカレイドの複眼的な価値観にも通じるものだと思います。仏教は葬式や法事だけではありません。日本人の精神性の根底にある仏教をどう活かしていくのか、とてもたいせつなことだと思います。

●

いま私たちは先行き不透明な時代を生きています。ニートが65万人、自殺者は毎年3万以上います。地域や家族がバラバラになって、精神の安定に寄与する場所がどんどん衰弱していきます。それに反応するように、トラウマを抱えた若いアーティストも少なくありません。アートの活動をしながら、心のバランスを取ろうとしているのかもしれない。自分と向き合うためのアート、自分探しのアートは、いま世界的な傾向にあると思います。

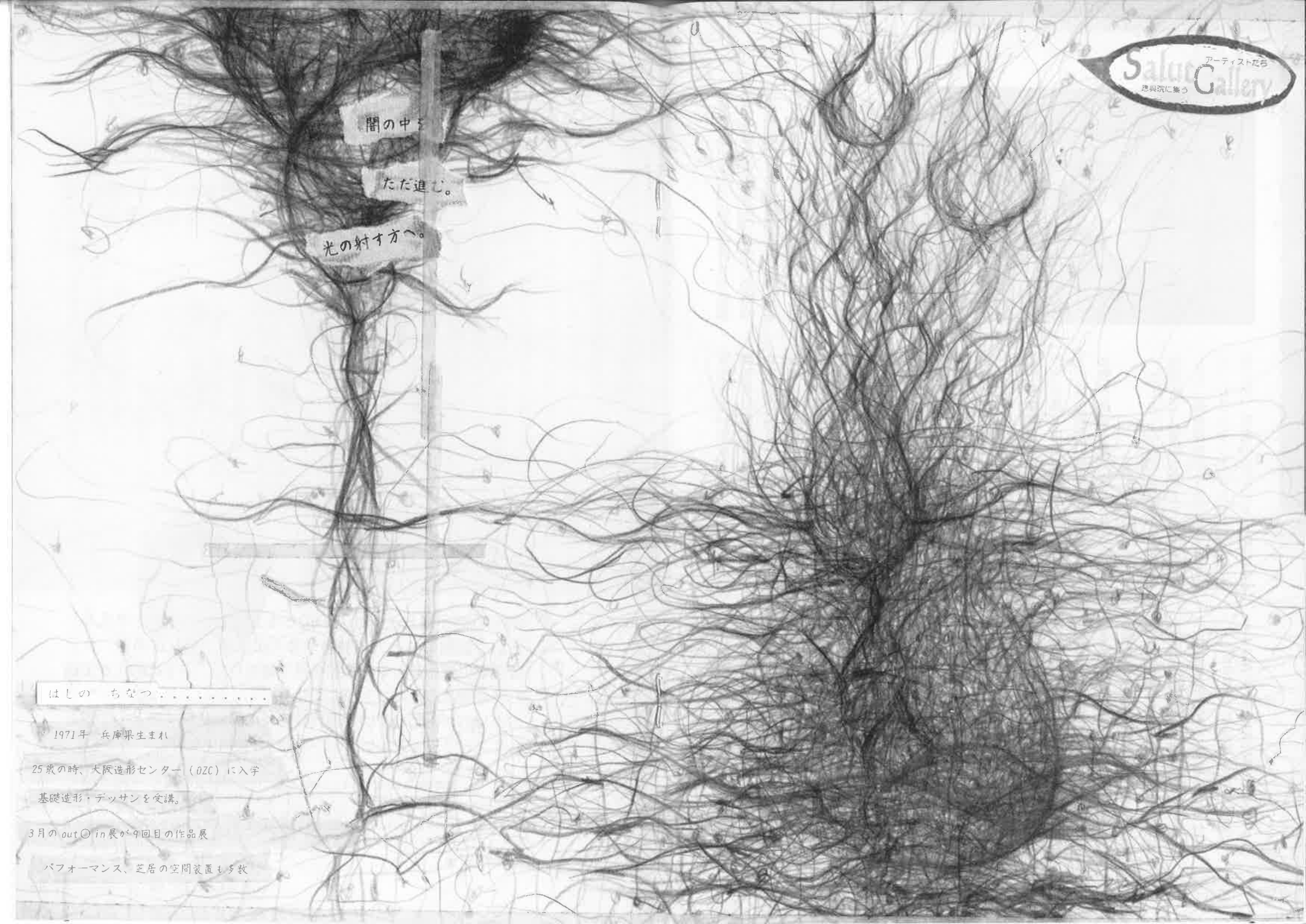
では、その心の指標となるものを私たちは何から学ぶことができるのか。容易ではありませんが、私はもう一度仏教という哲学や思想に学ぶ必要があると思います。

●

カレイドでは、大阪のさまざまな場所で、多彩なアートが交通しました。美術館やギャラリーだけでなく、レストランとかショップとかお寺とか、日常の中にアートが浸透していく。大仰にもっともらしく語るのではなく、自然な生活の中にアートがある。カレイドの目的は、そういう環境全体をつくることだったんです。

元々芸術は西洋から哲学としてもたらされましたが、これを日本のオリジナルな感覚としてどのように捉え直せばいいのか。かつて日本人の先人が、花鳥風月を愛でた生活に親しんだように、最早アートとは単に作品を指すものではないのかもしれない。自然の中で、私は生かされているというような共生感覚、いのちの感覚が、アートの持つ本質ではないかとも思います。その日本独自のアートが、いえ、日本だけでなく、東アジアの等しい価値として、西洋美術の世界に異なる何かを打ち出すことができるのではないか、と考えています。

（加藤義夫×秋田光彦　3月26日公開トーク「アートの『交響』空間」より抜粋・編集）



はしの　ちなつ

1971年　兵庫県生まれ

25歳の時、大阪造形センター（OZC）に入学

基礎造形・デッサンを受講。

3月のout⊙in展が9回目の作品展

パフォーマンス、芝居の空間装置も多数

スピリチュアル・寺子屋トーク
～「生老病死のコミュニティケア」に思う～

四天王寺国際仏教大学講師
谷山 洋三

第43回寺子屋トークは、“いのちを支えるビハーラを考える”という副題のもと、仏教者や多くの医療、福祉従事者、ケアの現場に携わる人々の参加を得て催された。少子高齢化が加速し、年間100万人以上が亡くなる多死社会のコミュニティケアのあり方が問われている現代。多くの課題を解くひとつの鍵としてスピリチュアルケア※の可能性が検討された。

※スピリチュアルケア
傾聴や対話などによって、スピリチュアリティの働きを確認していくこころのケア。窪寺俊之は、「スピリチュアリティとは、人生の危機に直面して「人間らしく」「自分らしく」生きるための「存在の枠組み」「自己同一性」が失われたときに、それらのものを自分以外の外の超越的なものに求めたり、あるいは自分の内面の究極的なものに求める機能である」と定義している。

仏教の現在と未来、そして地域福祉、在宅ホスピスに関心を持つ人たちにとっては、とても魅力的なイベントだった。現代仏教の問題に取り組んでいる人たちにとっては、松本の高橋卓志さんを應典院の秋田光彦さんが呼び、さらに坊主バーの清史彦さんも関わっているというだけで「これはオモロイ」となるはずだ。予想どおり、会場は満員になっていた。仏教者だけではなく、医療・福祉関係者も多かったようだ。

冒頭、先日のJR福知山線の事故被害者への黙祷から始まり、お経ではなく環境音楽の流れる中でのご本尊のライトアップと、この辺りは仏教色が見られたが、その後は会の終了まで、ほとんど仏教の「色」は出なかったが、スピリチュアルな「雰囲気」が時折感じられた。

秋田さんから、このイベントの趣旨が説明された。まず、「仏教がんばれ」ではないということ。「神宮寺の高橋さんのパワーに圧倒されたとしても、自分には何ができるのかを考えて欲しい」という配慮は結果的には杞憂だった。「こんなパワフルな坊さんがいたのか!?」という驚きが希望の光となって、多くの参加者にエネルギーを与えていた。

「死に場所は病院から家庭へ回帰しつつあるが、そこに僧侶が関わることは可能なのか?」「お寺の復権としてではなく、コミュニティケアのセンターとして活躍できるのか?」という問いかけ。これには、高橋さんが講演の中で淀みなく応えていた。その内容については、後段を読んでいただきたい。

以下、私の関心事である「スピリチュアルケア」に焦点を当てて今回のイベントを振り返り、高橋さんの衝撃的な回答についても私見を述べたい。

谷山洋三さん
1972年生まれ。四天王寺国際仏教大学人文社会学部専任講師。博士（文学）。専門は仏教福祉学、死生学。元・長岡西病院ビハーラ病棟ビハーラ僧。（特活）ビハーラ21事務局員、臨床スピリチュアルケア協会ネットワーク部門担当、（特活）日本ホスピス・在宅ケア研究会スピリチュアルケア部会世話人など、ビハーラやスピリチュアルケアの分野で活躍中。研究業績『仏教福祉学のキーワードを探る その2・苦－ビハーラ僧のスピリチュアルケア』（『日本仏教社会福祉学会年報』34号）ほか。共著に『スピリチュアルケアを語る－ホスピス、ビハーラの臨床から』（関西学院大学出版会）

コミュニティケアとは何か

私が高橋さんにお会いするのは二度目だ。最初は4年前、長岡西病院ビハーラ病棟で働いていた頃に、松本の神宮寺にお訪ねした。その時の印象は「僧侶というよりは文化人のような方だなぁ」というものだった。確かに仏教の色は見えないが、それは彼のこだわりではなく、こちらの（私の）こだわりに過ぎないのだ。彼の著作（『死にぎわのわがまま』現代書館）を読むと、禅僧らしい実存的なスピリチュアリティがうかがえる。現実世界の問題に対峙し続けることは、ある意味で修行であり、「己事究明」に直結するのではなかろうか。

さて、この日の講演の内容（目次）は次の通り。詳しくは、出版されたばかりの著書（『家で死ぬという選択』※企画室僧伽）を読んでいただいた方がいいだろう。

1. アキヒコ（岡村昭彦）に夢中になった理由
2. コミュニティケアに夢中になった理由
3. NPOに夢中になった理由
4. 家で死ぬ方法に夢中になれない理由
5. 現代仏教に夢中になれない理由

岡村昭彦さんについては、その著書（『定本　ホスピスへの遠い道』春秋社）を読んで知ってはいたが、高橋さんに強い影響を与えていたとは知らなかった。そう聞いて、高橋さんのモチベーションの一つが分かる気がする。本業（戦場写真家と僧侶）の枠を大きく超えて、社会に大きな貢献をしている（生命倫理学への貢献と、NGO／NPOによる様々な活動）。そして二人とも、いのちの現場に直接関わる仕事・活動をしている。

コミュニティケアとは「生活の基盤を置く場所で、私は私として成り立っている。だからそこからむりやり引き離されるのはいやだ。私が生きた『馴染み』のその場所で、私は病み、老い、そして死んでいくための支援である（※同書）。地域社会と大家族制度の崩壊と同時に失ってしまったケアの機能を、別の形で復活させるということだが、容易なことではない。様々な社会資源を有機的に結合させるには、大変な労力が必要である。それでも時代の流れは、施設型ケアから在宅ケア（もしくはその代替としてのユニットケアやグループホーム）に移り始めている。戦前生まれの人たちよりも明確に意志を発揮する団塊の世代は、10年以内に「高齢者」となり、今世紀の前半に死を迎える。コミュニティケアは単なる新しいケアの在り方ではなく、よりよい形で実現するべき課題である。その対象となる世代にとっても、彼らを支える世代にとっても、他人事ではない。自分自身の問題として考えなくてはならない。

NPOは高橋さんの活動の基盤だが、彼は既存のシステムを踏襲するのではなく、その地域や状況に適応した新しいシステムを構築している。ケアタウン浅間温泉も、あたかも自分自身が利用することを想定しているかのように、使いやすく機能的である。小規模・多機能のサービス拠点として、馴染みのある生活圏内に「あんしん」を提供しようとしている。

『家で死ぬという選択』には、アイルランドとイギリスの例が詳しく記されている。日本の医療者にとっても参考になることが報告されているが、スピリチュアルケアについては素直に肯けないところがあるので、このことに焦点を絞ってみたい。目次の最後の「5. 現代仏教の問題」にも関わることでもある。

スピリチュアルケアと宗教者

「スピリチュアルケアに宗教者は必要ですか?」という高橋さんの質問に対して、イギリスのホスピスマネージャーは「NO」と答えたという。彼にとってもショッキングだったようだし、私にとっても衝撃的な一言だった。

高橋卓志さん

臨済宗神宮寺住職・（特活）長野県NPOセンター代表・（特活）ケアタウン浅間温泉理事・（特活）ライフデザインセンター代表理事・特活夢バンク事業組合理事長・NGOアクセス21代表ほか。1948年松本市生まれ。「いのち全体のケア」は寺の本来の役目と考え、多彩な市民活動を展開。発題は、戦場写真家岡村昭彦に出会ったことで始まったいのちと向き合う活動の軌跡－チェルノブイリ医療支援システム構築からタイHIV感染女性の就業支援、団塊世代の知識、技術、ネットワークを生かす受け皿としてのNPOの構築と中間支援、遊興地としての役目を終えた地元浅間温泉を現代の湯治場＝ケアタウンとして復活再生させ、さらに地域に住まう人々の終焉まで看取りきるデイホスピス構想まで－が、つい最近終えたばかりのイギリス、アイルランドへのホスピスの源流を訪ねる旅の報告とともに軽妙かつ雄弁に語られた。

主著は『生き方のコツ、死に方の選択』（鎌田實氏との共著）・集英社文庫、『死にぎわのわがまま』・現代書館、『ホスピス―最期の輝きのために』・オフィスエム、新著に『家で死ぬという選択』・企画室僧伽。

しかしながら、彼の新刊を読んでみると、いくつかの誤解があるように思える。まず、「スピリチュアルケア」の意味について、どちらかというと日本にその概念が入ってきたばかりの頃の理解をしているようだ。つまり、spiritualを「宗教的」と訳していた頃の、宗教的ケアとほとんど重なり合うような解釈が見られる。「カウンセリングサービス」という見出しの内容は、私の目にはスピリチュアルケアに相当すると思えるし、著書での「スピリチュアルケア」の内容は、スピリチュアルと言うよりは宗教的に思える箇所もある。その担い手としての宗教者像は、チャプレンというよりは、スピリチュアルケアの専門的な研修もその素養もないお坊さんをイメージしているようだ。

別のホスピスのコーディネーターは「私の経験上、いままで『神とのいざこざ』を持つ人に出会ったことはありません」と言っている。高橋さんも経験上これに同意している。しかし私はビハーラ僧として、10名足らずではあるが「神（超越的存在）とのいざこざ」を持つ人に出会ったことがある。仏堂のあるビハーラ病棟では、入院患者の1～2割の方が定期的にお参りに参加している。日本での宗教的ニーズが皆無であるという認識を持つのは早計ではなかろうか。

イギリスのホスピスでは、常勤のチャプレンがいなくても、チャプレンや牧師は呼べばいつでも来てもらえるらしい。日本では「すぐに」来てもらえる態勢ができているだろうか？　さらに、先述のホスピスマネージャーは「宗教的エモーション（感情）を持った医療者、特に看護婦がいれば、それ（スピリチュアルペイン）は解消され、ホスピスが成り立っていきます」と述べている。日本には、宗教的エモーションを持っていて、かつそれを自覚している医療者はどれほどいるのだろうか？　そして患者・家族の話をゆっくり聞けるような環境なのだろうか？

「無痛の中にいて共苦を感じられるか」という批判は痛烈だった。対人援助に関わる人たち（私も含めて）は、そのこころを謙虚に受け取りたい。これは今回の講演でたぶん唯一の仏教者らしいの発言だったように思える。

現代仏教の問題として、「坊さんは一体何のプロなのか？」という厳しい問いかけがあった。「死の専門家」だと思っているかもしれないが、それは妄想に過ぎない。死の周辺にいるだけだ。私もこの点については同感だ。すべての坊さんが「生死」について深く思索を巡らしているわけではない。「死の専門家」となるための教材は膨大にあるが、すべての坊さんがそれらに手を付けているわけではない。

では、坊さんには何も期待できないのだろうか？

でも高橋さんのようなクリエイティブな坊さんもいる。――余韻を残したまま、第一部が終了した。

いのちの紙芝居

休憩時間には、2階ロビーで「お寺の出前」のイベントが行われていた。さっきまでの余韻が溶けていくような心持ちで、大崎さんのハーモニカの音色を聴いていた。

そして第2部のシンポジウムが始まった

まずは、米沢なな子さん。高齢者住宅情報センターの相談員の経験などから、有料老人ホームについてお話しされた。無料で、相談、施設紹介、見学の調整、時には契約に立ち会うこともあるという。真摯な対応をしていることがよく分かる。体が動かなくなったら入居できないので、終の棲家を探すのなら、元気なうちに入居するべきだという。確かにその通りだ。成年後見制度と遺言書をあらかじめ準備することも考えた方がよさそうだ。有料老人ホームは「自宅」なのだが、24時間看護師が常駐し、協力医、スタッフの教育・経験、そして覚悟が必要なので、ターミナルケアをするところは少ないらしい。

次は、南吉一さん。在宅ホスピスあおぞらの所長・医師としての活動を報告された後、いのちの紙芝居「健ちゃん棒」を実演してくれた。このお話しのあらすじを紹介しておこう。

●

健一くんのおじいちゃんが、在宅ホスピスケアを受けるために病院から帰ってきた。訪問看護師が点滴をしてくれ、往診医も来てくれた。おじいちゃん

は医師に「何か掴まるもの（精神的な支え）が欲しい」と訴えた。それを聞いた健ちゃんは、押入から棒を持ち出してきた。それは、家族みんなで富士山登山をしたときに使った杖だった。天井からその棒が吊され、ベッド上に座ったおじいちゃんは棒を握ってみた。棒には「おじいちゃん、ありがとう、健一」と書かれていた。棒に掴まって体を持ち上げてみると、体と心が癒されるようだった。おじいちゃんはいつも棒と一緒に生活を続け、最期の時にもその「健ちゃん棒」を抱えていた。

●

「健ちゃん棒」は、おじいちゃんの精神的な支えであり、家族の絆、特に孫の健ちゃんの愛情を示すシンボルである。体と心を癒してくれる、スピリチュアルケアの道具でもあったといえる。

三番目は、清史彦さん。私も関わっている（特活）ビハーラ21の趣旨と活動について説明し、僧侶としてビハーラ運動に関わっていった経緯を述べてくれた。「なぜ、末期になってから僧侶が呼ばれるのか。仏教は生きている人のためにあるのではないのか?」という思いは、現代仏教の諸問題に悩む僧侶たちの共通のものであろう。

最後は、元商社マンの医療コンサルタントでビハーラ21のメンバーの高橋俊市さん。今回のシンポジウムでは聞けなかったのだが、高橋さんがビハーラ21にかける思いは、「自分が生きてこれたのは、上の世代がいたからこそ。だから自分が動けるうちに、次の世代に何かを残していきたい」というスピリチュアルなものだ。

宗教者の可能性

スピリチュアリティは、日本語に訳しにくい言葉だ。敢えて浄土教的な表現するなら「阿弥陀の働き」である。分かる人にしか分からないだろうが、そこに宗教とスピリチュアリティの関係が見えてくる。

様々な宗教は、スピリチュアリティを独自に表現したものである。その時代・文化・社会の影響を受けているので、それぞれが別異なことを言っているように思えるが、深いところでは共通している。儀礼やその対価にしか興味がないような人はさておき、宗教者は教義の中で理解すれば（悟りを開くところまではいかなくてもいいだろうが）、スピリチュアリティを理解しやすい立場にいる。さらに、自分の信仰を客観視することが、スピリチュアルケアに資する準備になる。

ただし、宗教的ケア（祈願の援助や宗教的な声かけなど）とむやみに混同してはいけない。スピリチュアルケアの現場は公共性が強いところが多いからである。ターミナルケアの現場がよく知られているが、それだけではなく、一般の医療や福祉、教育現場においてもスピリチュアルケアは広がりつつある。高橋卓志さんが、宗教者によるスピリチュアルケアの限界を感じた理由の一つは、何の訓練も受けないまま、しかも相手のニーズを感じ取らないままでケアに臨む宗教者をイメージしているからではなかろうか。確かにそれではケアにならないだろう。ケアのためには専門的な訓練が必要なのである。

スピリチュアルケアは、宗教者のもつ可能性を引き出すことができる。布教伝道には役に立たないだろうが、宗教界は社会に貢献できる人材を送り出す可能性を持っている。特に、コミュニティケアやビハーラ活動／運動の現場にこそ、スピリチュアルケアが必要なのだ。

第2部ゲスト紹介

◇

南　吉一さん（医師／在宅ホスピスあおぞら所長）
1933年生まれ。1958年大阪大学医学部卒業。卒業後、大阪大学医学部衛生学（現・環境医学）教室に入る。1974年南医院開院。1993年から環境医学実習の非常勤講師を担当し、訪米ホスピス研修を指導する。1998年在宅ホスピス「あおぞら」を開設、7年目の今年南医院を後進に託し、在宅診療活動に専念。在宅で終末期をすごす人の死への恐れを和らげるために、手作りの紙芝居で患者と対話する。

米沢なな子さん
（高齢者住宅情報センター大阪相談室長）
神戸生まれ。大学卒業後、タウン誌の編集に10年携わる。1997年より有料老人ホームの運営会社で広報および生活相談室で勤務。2003年11月より現職。センターでの方針を「まずは、多くの方々に知っていただく。そして独自の基準による第三者評価事業に取り組み、ホームの質の向上に努めたい」と話す。

高橋俊市さん
（【特活】ビハーラ21理事・医業経営コンサルタント）
1938年京都府生まれ。商社勤務時代、医療ガス部門に15年間在籍、利益追求を第一義とした企業人として医療に関わる。8年前、義母の葬儀で聞いた導師の法話に心を打たれ、仏教に興味を持つ。以来枚方の仏教道場である響命精舎（けいめいしょうじゃ）に参加し、現在も勉強中。

清　史彦さん
（真宗大谷派瑞興寺住職・【特活】ビハーラ21事務局長）
1952年大阪生まれ。京都大学法学部卒業後商社に6年半勤務。瑞興寺長女との結婚後、京都大谷専修学院入学、得度を受け僧侶となる。1992年以来大阪ミナミに坊主バーを開き、現代の開かれた寺の実践を試みる。1996年に瑞興寺住職に、同年真宗大谷派大阪教区会議員、2001年からは宗議会議員をつとめる。ビハーラ21には事務局長として参画、「ビハーラ僧研修講座」の企画にもあたる。

〝いのち〟を語り合って5年
～いのちと出会う会50回

▲50回記念を参加者とともに祝う

2000年6月にスタートした「いのちと出会う会」。以来5年間、ほぼ毎月欠かさず開催され、今や應典院の名物事業として定着した。

去る5月15日の50回記念には、47名が参加、また過去の49人のゲストのみなさんから、多くのメッセージをいただいた。

「いのちと出会う会」の足跡をふり返るとともに、50回記念当日を報告する。

「いのちと出会う会」は、代表世話人・石黒良彦さんの呼びかけがきっかけで始まった。

石黒さんは、89年に二男・邦之君を急性の白血病で、97年には妻・佐知子さんを胃がんで亡くした。ふたりのはやすぎる死に直面し、魂を奪われるように感じた石黒さんは、心のよりどころを求め、さまよっているとき、後に第1回目のゲストとなるホスピス医・南吉一さんとの出会う。

南さんの後押しもあり、石黒さんは「ふたりの死を無駄にしたくない。生き直そう」と「いのちと出会う会」を始めた。

以来ほぼ毎月第3木曜日に開催され、医療、福祉、介護さらに国際協力、宗教まで幅広いテーマで「いのち」について語り合ってきた。話題提供者は、石黒さんの幅広いネットワークからお願いした方ばかり。

話題提供者が1時間語り、その後は参加者が共に「わかちあう」。

「人から直接話を聞くことで自分の考えが深くなった」とは石黒さん。参加者それぞれの声を大切にし、「わかちあい」の時間を設けることで、それぞれ気持ちを新たにしてもらいたいと願う。

「5年間、無我夢中で50回」……。50回記念の当日、まずは石黒さんがこの5年間をふり返った。

●

「〝いのちと出会う会〟を発足したのは、二人の死の体験がありました。〝ふたりの死はなんだったのか〟、〝二人の苦しみは何か意味があったのか〟〝次の世で二人は元気に暮らしているのか〟と、心の中で問い続けていました。けれど、会を続けていく中で、死を考えるだけでなく、死を見ることで、生きる力を得たいという気持ちに変わってきました。生きる意味とか、生きる目的とか、なんのために私はうまれてきたのかとかそんなことを……」

●

発会当初は、確かに〝死〟をテーマとしたものが多い。しかし、石黒さんの心境の変化と共に、そのテーマは広がっていく。それはすなわち、石黒さんの活動の広がりにほかならない。

現在、野宿者支援、釜ヶ崎での活動を初め、多くの社会活動に参加する石黒さんのエネルギーには脱帽するばかりだ。

現代では、死後の救済を説くのが仏教であると捉えがちである。しかし、そもそもお釈迦様は、よりよく生きることを教えとした。〝死〟から〝生〟へと、石黒さんの考えが変化したのも、應典院という寺で会が行われていることに、無縁でないように思う。

●

「かつて、私はオヤジ狩りにあった経験がありますが、死ぬような思いをしたのはもちろんですが、しばらく続いた肩の痛みが、いろいろと考えるきっかけを与えてくれました。

多くの人は、痛みがないのがあた

りまえというか、考えない生活をしている。痛みを知って初めてその苦しみを知ることができるのに……。

ふたりの死もそうだと思います。あたりまえと思っていた家族の生活が突然あたりまえでなくなる……。それがどれだけつらく、苦しいことか。

あたりまえの生活が、どれだけの恵みの中で支えられているのか、それを今は実感できるんです。会を通じて、そのことをより深く感じることができるようになったことに、感謝しています」

●

毎回、会では話題提供者が語り、参加者の〝わかちあい〟の時間を持つ。ゲストの話題を通して、参加者が自分を語り、自身の生へと意識を傾けていく。

自身の病気を語る方、子どもを失った経験を語る方……、悲しみの体験が語られる。しかし、その体験の最後には〝生〟に対する希望で締めくくられることが多い。

悲しみを共にし、いのちに対する願いに気づく。

●

「語ることを通じ、妻も息子も与えられた生を精いっぱい生きた、と思えるようになりました。二人は今も、私の人生を輝かせてくれています。今、この世の中で私は何をなすべきなのかということが、自分の人生のテーマです。

今現在、戦っている方、外国にいっていろんな貧しい人々、苦しい人々に手をさしのべられている方々の話を聞くことで、少しでも生きる勇気を持っていただけたらと、5年間続けてきたしこれからも続けたいと思っています。

つながっている命の中に私たちは生きています。49人のゲストの命、話された参加者の多くの命、その中で話されたいろんな命、多くの命が〝いのちと出会う会〟の中で出会ったと感じています。

いろんな苦しみ、悲しみと向き合うことが自分自身と向き合うことになると思います。自分がこの時代に生きていることは何なのか、それぞれの人が考えるきっかけになるように願い、〝いのちと出会う会〟をこれからも続けていきます」

多くの〝いのち〟とつながりながら、これからも〝いのちと出会う会〟は続いていく。

【2000年】

■第1回　6月15日
「死にゆく患者に語りかける言葉」
在宅ホスピスあおぞら所長　南吉一さん

■第2回　7月20日
「仏教紙芝居は心のアート」
浄土真宗観念寺住職　宮本直樹さん

■第3回　9月21日
「エンディングサポート～自分らしい最期をつくりたい」
宝塚NPOセンター事務局長　森綾子さん

■第4回　10月19日
「死別へのこころの準備」
医師　谷荘吉さん

●

【2001年】

■第5回　1月18日
「不登校の子どもと家族」
不登校新聞記者　福村幸子さん

■第6回　2月15日
「難病と闘う子どもたち」
メイク・ア・ウィッシュ・ジャパン広報　大野寿子さん

■第7回　3月15日
「ネパールの子どもたちといのち」
ネパールの子供を育てる会会長　槙本昭彦さん

■第17回　3月20日
「自分らしい葬儀をデザインする」
宝塚市立中央公民館　木崎いずみさん

■第18回　4月18日
「ささえあう。寄り添いの介護」
大阪YWCAケアハウス・シャロン千里　佐久間早苗さん

■第19回　5月16日
「青い目の禅僧とニッポン」
禅岳寺住職　峰本卓潤さん

■第20回　6月20日
「遺児たちの心に七色の虹を」
あしなが育英会　伊藤道男さん、濱上景さん

■第21回　7月20日
「クマの棲める豊かな森を」
日本熊森協会企画推進局長　瀬戸悠子さん

■第22回　9月19日
「若者は"死"から何を学ぶのか」
奈良保育学院　野田隆生さん

■第23回　10月17日
「死にゆく人々との対話」
ホスピス医・南吉一さんと阪大医学生のみなさん

■第24回　11月21日
「盲目となって見えてきた人生の意味」
日中総合交流事業アドバイザー　菅野芳宣さん

■第34回　11月20日
「子どもたちに導かれて～いのちの不思議」
鍼灸師・介護支援専門員　渥美覚さん

■第35回　12月18日
「元気で長生きPPKのコツ」
日本笑い学会副会長　昇幹夫さん

●

【2004年】

■第36回　1月22日
「地雷畑で見た夢」
テラ・ルネッサンス代表　鬼丸昌也さん

■第37回　2月19日
「『闘病闘唄』トークとミニライブ」
シンガー・ソングライター　KOUTAROさん

■第38回　3月18日
「死を見つめるということ」
岸和田喜多病院カウンセラー　岩崎美樹さん

■第39回　4月15日
「人間として生を受けた喜び」
私塾わんど塾塾長　山藤忠雄さん

■第40回　5月20日
「人生は逆転できる」
人財育成コンサルタント　笹岡郁子さん

いのちと出会う会　開催記録（1回～49回）

■第8回　4月19日
「人生の永遠を問う～死は終わりではなく」
ライフカウンセラー　守屋武さん

■第9回　5月17日
「わが家で死にたい～家族と看取り」
田辺病院看護婦・僧侶　中村敏さん

■第10回　6月21日
「病院のなかの生と死・家族と別れの時」
関西医科大病院看護部長　大蔵サチ子さん

■第11回　7月19日
「ホトケと癒し・仏教看護に何が可能か」
浄土宗済橋寺住職・神戸医師会看護専門学校講師　明石和成さん

■第12回　9月20日
「掃除と炊き出しこそ、わが人生」
綜合開発代表取締役　樋口順三さん

■第13回　10月18日
「ハンセン病の患者さんたちと、出会い、別れ」
訪問看護婦・大阪医専講師　渡邊典子さん

■第14回　11月15日
「オキナワ捕虜収容所秘話」
写真家・スタジオ経営　渡辺憲央さん

●

【2002年】

■第15回　1月17日
「いのちと平和を語りつぐ」
関西こども文化協会副理事長　蔦田夏さん

■第16回　2月21日
「平成版・看病用心鈔を語る」
浄土宗安福寺僧侶　大崎信久さん

●

【2003年】

■第25回　1月16日
「看取りとホスピス」
大阪生と死を考える会会長・はやしやまクリニック名誉院長　谷荘吉さん

■第26回　2月20日
「剛は自転車で転んで死んだ」
腎性尿崩症友の会　神野啓子さん

■第27回　3月20日
「釜ヶ崎の人々から教えられたもの」
大阪建設労働者生活相談員　入佐明美さん

■第28回　4月17日
「遺族として共に生きる」
神戸ひまわり遺族の会　中村寿子さん

■第29回　5月15日
「『生と死の教育』と若者たち」
関西学院高等部教諭　古田晴彦さん

■第30回　6月19日
「小さくされた者の側に神は立つ」
日本フランシスコ会神父　本田哲郎さん

■第31回　7月17日
「紙芝居『中村久子の生涯』」
紙芝居師　杉浦貞さん

■第32回　9月18日
「小児病棟に元気を届けよう」
あそぼっくる代表　出口雄二さん

■第33回　10月16日
「『ホピの予言』上映会」
ランド・アンド・ライフ　辰巳玲子さん

■第41回　6月17日
「子どものちから」
釜が崎こどもの里　荘保共子さん

■第42回　7月15日
「ガンを超え、めざせ地平線」
サイクリスト　エミコ・シールさん

■第43回　9月16日
「大人が変わらなければ子どもは変われない！」
NPO法人・青少年育成審議会理事長　吉村憂希（うさぎ）さん

■第44回　10月21日
「生命からのメッセージを伝える」
TAV交通死被害者の会事務局　米村幸純さん

■第45回　11月18日
「フィリピンへ虹の橋を」
片岡鍼灸整骨院院長　片岡春樹さん

■第46回　12月16日
「人生の金メダリストになるために」
バレーボール五輪金メダリスト　中野真理子さん

●

【2005年】

■第47回　2月17日ビデオ鑑賞
「アジアの子供たちから学ぶもの」
NGO沖縄アジアチャイルドサポート代表理事　池間哲郎さん

■第48回　3月17日
「マザーテレサに出会って」
サンチの会代表　是枝律子さん

■第49回　4月21日
「命といのちを見つめて」
「病児遺族わかちあいの会小さないのち」代表　坂下裕子さん

秋田光彦主幹から……

てんてこまい

呼吸するお寺・應典院の、1月～4月の活動記録です。関連のエンティング事業なども併せて報告します。

1月

◇1日……晴れやかな新年を迎える。希望に満ちた一年としたい。
◇4日……恒例の年頭詣。15日までの間、約200軒の檀信徒宅を訪問。新年のお祝いを家々のご先祖に届ける。
◇13日……スタッフ交流会。最若手の大阪市会議員・福島しんじ氏事務所にて、教育行政について意見交換。若き感性を勉強熱心さに敬服。その後、焼肉で新年会！
◇17日……阪神淡路大震災10周年。10年前、神戸の廃墟跡を駆けた思い出。應典院本堂でスタッフとともに追悼の法要と法話を行う。
◇22日……和泉市コミュニティ講座で講演。
◇25日……上町台地からまちを考える会の事務所にて、関西経済同友会の幹部の方々と今後の都市ビジョンについて意見交流。私は持論の「学習共同体」説をひとしきり。
◇26日……大阪警察病院で、術後1年の検診結果がシロと出て安堵。体調万全でがんばろう！

2月

◇1日……寺町倶楽部の運営委員会。新年度の体制変更について詳細を述べる。
◇4日……総幼研フォーラムにて、明星大学の高橋史朗教授の講演。巷の風評は別にして、論旨も明快で話しぶりも堂々たるもの。夜は総幼研20周年記念祝賀会。
◇7日……大阪経済大学の長田寛康教授と、新年度の特殊演習「演劇をマネジメントする」について打ち合わせ。1学期間全8回の講義。
◇14日……NHK「クローズアップ関西」の取材。生前個人墓にまつわる、死後の自己決定がテーマ。
◇17日……いのちと出会う会。「アジアの子どもたちから学ぶもの」ビデオ鑑賞。
◇18日……神戸被災地NGO協働センターにて「若者と雇用」をテーマに述べる。
◇19日……千葉大学の長田謙一教授の研究室一行が見学。関西の個性的なアートセンターを視察されているとか。
◇21日……浄土宗千葉教区教化団の一行20数名が見学。應典院の社会活動を述べる。
◇24日……空堀の文化施設・直木三十五記念館オープニング・セレモニーに参加。市民の手作りミュージアムの快挙！上町台地の新しい文化スポットの誕生がうれしい。

3月

◇1日……朝日新聞インタビュー取材。
◇7日……上田紀行さんの紹介で、京大大学院の日高明君と面談。少林寺拳法のスポーツマンだが、拳法を通して仏教に関心を持ったそうだ。
◇11日……地元夕陽丘中学校の卒業式に来賓として参列。いつものことだが、若い人たちの巣立ちに胸が熱くなる。子どもたちの未来に、我々大人の責任は大きい。
◇12日……井上治代さんが主宰する桜葬ネットワークのシンポジウムに参加。桜の下で眠る、究極の樹木葬！
◇14日……原案を担当した映画「カーテンコール」の宣伝会議のため、配給会社のコムストックの佐藤仁美部長が来寺。
◇15日……NHK「ぶらり関西」の取材。最近下寺町の注目が大きい。演劇の應典院をアピール。
◇17日……いのちと出会う会。サンチの会の是枝律子さんがマザーテレサを語る。
◇18日……ココルームで「仏法のお庭」第1回を実施。会場は閑散としていたが、読経と法話の2時間のライブ。私なりの「教化活動」として続けていきたい。美しい仏教にふれてもらえたら。
◇20日……大蓮寺春季彼岸大法要。
◇21日……生前個人墓・自然の新契約者対象の帰敬式。仏教入門の道場。参加8名。夕方からは、アートの祭典・カレイドスコープを應典院にて開会。若者たちが盛大に。
◇26日……カレイドの最終日に、美術評論家の加藤義夫さんと対談。お寺でなぜアートなのか、を論じ合う。刺激的な内容でした。
◇28日……ココルームの「紙の芝居劇場」のイベントにゲスト参加。元ホームレスのおじさんたちの立体紙芝居の舞台に感動。表現することによって、生きる力を取り戻す。

4月

◇1日……創教出版新入社員就任式を應典院本堂で厳かに。幼稚園と合同開催。
◇5日……映画「カーテンコール」関係者試写。
◇7日……應典院の年度所感を述べる。お寺の社会教化事業としての取り組みを強調。
◇10日……称念寺様で、法然上人輪番御忌法要に出勤。7ケ寺出勤のゴージャスな儀式。
◇14日……尊敬する神宮寺の高橋卓志さんが来寺、8月開催のモンゴル僧声明ライブの打ち合わせ。
◇18日……石井聰亙監督を招き、新作「鏡心」のプレス試写を應典院で開催。10社参加があり反響が期待できそう。
◇19日……梅田ロータリークラブ月例会で、大阪の寺町文化について講演。
◇21日……新設なった大阪大学コミュニケーションデザイン・センターを訪問。旧知の研究者たちと「社学協働」の可能性について協議。夜はいのちと出会う会。病児遺族わかちあいの会の坂下裕子さん。
◇22日……府立の現代美術センターの肝いりで、新たに大阪アートNPOコンソーシアムが発足、8団体のひとつとして参加する。今年の暮れに大掛かりなアートフェスを計画。
◇24日……浄土宗関連の東京の淑徳大学の長谷川匡俊理事長が来寺、大蓮寺・應典院の社会活動を説明申し上げる。
◇26日……大阪経済大学の特殊演習「演劇をマネジメントする」第1回講義。息子や娘の世代の若者たちに、1学期間続く演劇の海図を提示する。

應典院寺町倶楽部 主催・共催の催し ラインナップ・・

いのちと出会う会

第54回　10月20日（木）
「視覚障害者とともにマラソンを」
話題提供者：佐伯典彦さん
（デイサービスセンター国津園・介護福祉士）

第55回　11月17日（木）
「掃除と鍵山秀三郎さんに学んだこと」
話題提供者：佐藤弘一さん
（西宮掃除に学ぶ会代表）

※いずれも第3木曜日18:30～21:00まで

「アートなまちの探検隊 VOL 2」

（第3回 大阪・アート・カレイドスコープ "do art yourself" 協賛事業）

山口洋典さん（上町台地からまちを考える会事務局長）を案内人に迎え、ワンコリアフェスティバル、からほりまちアートなどのまちの「非日常性」から「日常性」を探る上町台地ツアー。
○日　程：10月30日（日）
○会　場：上町台地周辺
○参加費：1,500円

主催：應典院寺町倶楽部
共催：上町台地からまちを考える会
協賛：大阪府立現代美術センター

★お問合せ・ご予約は……
應典院寺町倶楽部
FAX06-6770-3147
メール info@outenin.com

第3回　大阪・アート・カレイドスコープ
「Do Art Yourself ～すべての人は表現者」

現代美術を通じて大阪の姿を世界に向けて情報発信し、大阪の都市の魅力の向上を目指すアート事業に参画します。

「自適人の肖像」展

上町台地は古くからの職業と新たなビジネスが渾然一体となり、職、住、遊、学の人が多様に関わっている。この上町台地ならではの仕事（職＝生計をたてること）をしている「自適人」を紹介。作家は、自適人と出会いインタビュー取材し、触発された何かを作品化する。人間と仕事、技とアートを結ぶ展覧会。
○日程：12月5日～17日
○会場：大阪府立現代美術センター

「遊行のフォークロア 上町台地・境界を歩く」展

岩を立てることから、それは始まる。毎日2回、せわしい大阪の、しかも師走の街を作家大久保英治氏がただひたすら歩く。上町台地や下寺町の美しい樹木林、人々の雑踏、車の群れ、連なる寺院とネオン輝くホテル街。周辺が織りなす時は、歴史と文化を育む。彼はその中に入り、うごめき、身体を使い、立ち上るエネルギーと場を知り、視覚化する。風を受け、人々と出会い、ともに歩く人たちと語らい、弾む息を感じる。
○日程：12月7日～13日
○会場：應典院・下寺町周辺

主催：大阪府立現代美術センター
企画・運営：大阪アートNPOコンソーシアム
コーディネート：應典院寺町倶楽部
協力：上町台地からまちを考える会

【大阪アートNPOコンソーシアム】
NPO法人大阪アーツアポリア／應典院寺町倶楽部／特定非営利活動法人キャズ（CAS）／NPO法人こえとことばとこころの部屋（cocoroom）／NPO法人DANCE BOX／NPO法人Beyond Innocence／NPO法人記録と表現とメディアのための組織remo）／NPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト（recip）

應典院寺町倶楽部のニューズレター
サリュ
Vol.45

■発行日
2005年9月10日
■定価
200円
■編集人
秋田光彦
■スタッフ
池野亮光、大塚郁子、田中いずみ
■発行所
應典院寺町倶楽部
〒543-0076
大阪市天王寺区下寺町1-1-27
TEL 06-6771-7641
FAX 06-6770-3147

編集後記

小説『ソフィーの世界』は、「あなたは誰？」と書かれた手紙がきっかけで、深遠な哲学の道を歩む14歳の少女の物語だった。14歳でなくても「私はだれ？」という問いは誰もがもちうるものではないだろうか。

「私はだれ？」に明解な回答を与えてくれるものではないけれど、その謎解きの小さな手掛かりとなるのが現代アートだ。「out ○ in 展」座談会で語られたように、過去の記憶を想起させたり、普段見落としてきたものが見えてきたり、想定外の感情を引き起こしたり。「地獄の釜をのぞくようなもの」とある人は表現したが、隠された内面をのぞくような、恐ろしくもドキドキする体験だ。そこで導かれた感情の所在に思いを巡らす観る側と同様に、作家自身もその直感の由来を探り、「私はだれ？」の問いと常に向き合っている。

今中さんが既成のルールや手法にとらわれないアウトサイダーアートの表現に魅了され、クライアントの創作環境づくりを最重要視するアトリエインカーブを立ち上げられたのも、自らのオリジナリティを探す旅に出られたことがきっかけだ。「違い」に縛られない「個」としての自分を表現できるデザインの世界。そこにとどまることなく、より深い自らへの問いが、新しい出会いをもたらし、フィールドを広げたのではないだろうか。

妻子の死に直面し、「二人の人生は何だったのか」との問いから「いのちと出会う会」を立ち上げられた石黒さん。当初は医療、生と死の問題を扱われたが、野宿者、世界の貧困にある子どもたちの支援、環境保全への啓発……など関心も広がり、毎月の例会は50回を迎えた。体会もなく、その継続を支えたのは情熱と問題意識であった。石黒さんは「ますます自分の存在の意味を考えるようになった」と語る。

小説のソフィーは時空を超えて思想家に出会い、私を探す旅を続けていくが、時空を超えずとも、まっすぐに向き合えば「私はだれなの？」か、少しわかるときを迎えられるのかもしれない。

（大塚郁子）

ものを創ることへの関心はその当時から持っていましたが、当時はまだ手先を動かすことが好きという程度の感覚でした。母は京都呉服の絵師、父は大工という家庭に育ったこともあり素地はあったのかもしれません。でも、私にとって一番重要だったのは、障害ゆえに体を酷使せずに自分一人でもできる、座ってできるものは何かということ。それがデザインだったんです。障害があるとかないとか、人種が異なるとか、性別が違うとか、そういったさまざまな「違い」に縛られずに「個」としての自分を率直に表現できる世界は、デザインだけだったんです。芸術系の大学へと進学し、乃村工藝社という大手のデザイン会社に入りました。大型施設の空間デザインを中心に毎日膨大な数の仕事をこなして実績を積み、個人事務所を開くまでになりました。しかし、そういった仕事をすればするほど既存のデザインだけでなく、自分自身のデザインに対しても自問することが多くなりました。いったい自分のオリジナリティとは何なんだろうと。

30代に入ってから、リハビリも兼ねて一年間休職をして、世界の建築物を見て回ることにしました。世界各地を巡って、最後にたどりついたのがスイス・ローザンヌのアール・ブリュット美術館*でした。ここで初めて「アウトサイダーアート」に出会ったのです。今まで見たことのないような、新鮮さを超えて、「気持ち悪くなるほどの」オリジナリティを感じた瞬間でした。既存のルールや手法にとらわれることなく、自分の表現を自由に創りだすこと。また、その表現が社会の中できちんと評価されていく。それが、デザインで、アートで自立していくことの一番の基盤なのだと思いました。自身のオリジナリティを模索してきた私にとって、「表現とは何か」ということの根底にあるものを叩きつけられた瞬間だったのです。

見守ることは対等なコミュニケーション

帰国してから、軽度の知的障害をもつ学生との出会いをきっかけに、03年に多くの知的障害をもつ方々とデザイナー達でアトリエインカーブをスタートさせました。私たちスタッフの仕事は、作品の創り手であるクライアント*の創作環境をつくり、見守ること。そしてそれを社会にアウトプットすることです。最近は、海外からのオファーもいただくようになりました。

とくにクライアントの創作環境を見守り続けることは、むずかしい仕事です。作品づくりそのものには干渉しません。むろん、放ったらかしにしているということでもなく、創作中にいろんな壁に直面しているプロセスを注意深く見つめながら、彼らがその時に必要としているモノをすっと目の前に出してあげる。これは簡単にできることではないんです。「見守る」ことの基本は、対等なコミュニケーションなんです。クライアントとスタッフが日々対話するなかで、お互いの感覚・感性を知っていく。そしてそれぞれの立場で作品づくりに必要な役割を果たしていく。だから私はできるかぎり一日一回はクライアントやスタッフと話をする時間を取っています。わずかな時間でも彼らとのコミュニケーションを交わすことで、より深い信頼関係を築くことができます。その意味では、ものづくりの環境とは目に見えるハード面だけでなく、彼我の関係という目に見えない面の充実がとても重要だと思います。

▲若かりし頃の今中さん

私は環境が人を作ると考えています。アトリエインカーブはそのことを最重要視して生まれました。クライアントのためのインカーブなのです。この先、このアトリエを巣立って、独立していく人も出てくることでしょう。そうなってほしいと思っています。しかし、クライアントがどこで活躍していても、アトリエインカーブそのものは、いつまでも変わらない場所でありたい。創作環境をつくり、見守り続けるということは、表現の場がいつも変わらず保証されているということなんです。

すべての表現者にとって、「平和」がそこにありつづけるということ。これが私の変わらぬ願いですし、アトリエインカーブの永遠の存在理由なんです。

*アウトサイダーアート：精神病患者や幻視家など、正規の美術教育を受けていない独学自修の作り手たちによる作品のこと。既存のアートの枠組みを突き抜けた、芸術的教養に毒されていない表現として注目されている。

*アール・ブリュット美術館：アール・ブリュットとは「生の芸術」の意。アウトサイダーアートを展示するために1976年に開設された美術館。

*クライアント：アトリエインカーブ内でのアーティストの呼称。